

特別  
千12  
3643  
25



梅若重氏  
昭相年書  
寄贈



梅若誠不即氏  
昭相年書





目錄

砂一 雜伎二 弓八情三 白髮四

老松五 白樂天六 兩月七 冰室八

志賀九 養花十 加茂十一 吳服十二

右近十三 竹生鴉十四 玉井十五 大社十六

寢覺十七 江鴻十八 逆勇十九 代主二十

皇帝二十一 九世戶二十二 和布刈二十三 嵐山二十四

金札二十五 岩松二十六 行端梅二十七 夕顏二十八

源氏傳二十九 宋女三十 野宮三十一 佛恩三十二

定家三十三 江口三十四 芭蕉三十五 楊貴妃三十六

丰歌三十七 千手三十八 井筒三十九 觀女四十

二人辭三十一 每布慶三十二 落葉三十三 卯矢三十四

吉野靜三十五 雲雀山三十六 松風三十七 熊野三十八

高野物語三十九 六浦四十 羽衣四十一 杜若四十二

誓願寺四十三 西行梅四十四 遊行柳四十五 葛城四十六

雲林院四十七 小垣四十八 吉野夫人四十九 胡蝶五十

春采 百一 錦木 百二 芦刈 百三 安宅 百四  
盛久 百五 小袖曾我 百六 小督 百七 松虫 百八  
七騎落 百九 西王母 百十 東方朔 百十一 道明寺 百十二  
論藏 百十三 鶴龜 百十四 那郭 百十五 唐船 百十六  
天鼓 百十七 梅枝 百十八 富美鼓 百十九 三矢 百二十  
一角仙人 百二十一 之論 百二十二 竜田 百二十三 卷箱 百二十四  
室君 百二十五 陸馬 百二十六 花月 百二十七 東屋居士 百二十八  
自雲居士 百二十九 放下僧 百三十 玉島 百三十一 浮船 百三十二  
通小町 百三十三 三井寺 百三十四 梅川 百三十五 百一 九十六  
柏崎 百三十七 奇占 百三十八 山姥 百三十九 春日龍神 百四十  
善界 百四十一 騎馬天狗 百四十二 車僧 百四十三 大會 百四十四  
善知鳥 百四十五 阿漕 百四十六 舟橋 百四十七 夜鳥 百四十八  
鐘 百四十九 鶴飼 百五十 項羽 百五十一 野守 百五十二  
舍利 百五十三 第六天 百五十四 龍虎 百五十五 烏帽子折 百五十六  
熊取 百五十七 正尊 百五十八 忠信 百五十九 橋辨慶 百六十  
大佛傳 百六十二 夜討曾我 百六十三 禪師曾我 百六十四 錦戶 百六十五

圓柄 百六十五 葵上 百六十六 安達原 百六十七 鉄輪 百六十八  
羅生門 百六十九 紅葉狩 百七十 大江山 百七十一 現土鶴 百七十二  
張良 百七十三 小飯名 百七十四 土橋 百七十五 大蛇 百七十六  
後成忠度 百七十七 生田教盛 百七十八 知章 百七十九 巴 百八十  
雷電 百八十一 屏 百八十二 酒 百八十三 徳氏 百八十四 法上 百八十五  
海士 百八十六 融 百八十七 當摩 百八十八 合甫 百八十九  
大魂程 百九十一 程々 百九十二

高砂

松の葉も 赤松の 其氣色 さらさら  
 みて 花の 時をわらふ 山の 時を  
 まで 二十年の 色 雲の うらみ 深く  
 み 松の 葉 十之り 共 けり けり  
 を みる せ 松を えれ どの 紫の 露の 玉  
 心 みる けり ありて せ けり けり  
 どの けり 敷き ありて けり けり けり  
 此の 葉 赤松の 葉 ありて けり けり けり  
 其 吉 みの 奇 なる けり けり けり  
 此 風 聲 水 音 遠 高 物 あり けり けり けり  
 此の 林 の 葉 ありて けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 色 赤松の 葉 ありて けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 皇 乃 高 爵 ありて けり けり けり



年那の色も澄なり傾のえれ松のせもうつ  
るけ青海波とる是は後 神と名その道  
まゝ京都のまゝあつたけい されう還城ま  
りまい して万歳の 小忘衣 子んくつか  
りて忠魔をいひたさむる子あし青福を  
りてさし木末の民をなごく 萬歳樂よ命  
をのふ相せうね風紙とる聲すだのむ

種波

りむり唐國の竟落の法仲もこえつて  
万歳りまつるとさるやわりて慈悲を  
海空海も音くたさるあよきつりあり  
るくそれは度も亦氷あくねさう子とあ  
る高き屋りの度りてみまは煙とる民のたまを  
りてさし木末の民をなごく 萬歳樂よ命  
をのふ相せうね風紙とる聲すだのむ

よためをひくもさる者物もみとのり  
國よあまねく三年の心腹ゆるらさう  
其年月も想まれ沈没の志砂のたけり  
まりて宮を豊年のの酒おゆりぬぬもや  
るくやまふも子由實りや秋万歳  
りちいふまをたさるまつりぬまは音さ  
し心のほけりし海やては鶴のねまき  
海もねびらうし清徳と樂ぬ山ののきよ  
るも志きうぬ教も大君の國の生るむ色木  
色木へらりる清り國の種波の梅のあよ  
志たふ白ひも四方も音く一花ひらぬ  
る中皆書ぬわ万代の程あさうめてる  
まははの音語さう西向う 上りあふり  
る種ぬ清も鳥乃一色物とる鳴鳥乃  
まの曲春雪物とるさるん 名思紙やぬ









現大はさるるの神徳よりなり  
まはしく

白鬚

リハキリ西天小世一  
釋尊其志のまをく  
志海有り 我の相成道のほゆき  
流布の地はまの可より有り  
此のまをく人よりを普く  
後ききまをく人く  
切氣生息有佛性め来  
易れ波り色一紫の  
とりの海とあり海の大宮  
このありは人壽百成り時  
志道とせれはりく  
水面西右脇伸抜提の海と  
佛の常恒不滅法界の妙

ハ昔ありはるの海と成  
覺するの時ハ  
の法代ありはるの法  
小比叡の林鹿は海や志賀の浦の邊  
に釣とをるる老翁あり  
と公相とあり地門あり  
わすはる法まのり地とあり  
なれ翁答つてや我人壽  
初めより此山のまをく  
まをく翁忽ち成りし  
翁地たりは地まのり  
の可きぬ下とあり  
力あるはる翁先を  
此の東方より海なる  
此地はる法とあり

青二万歳の山より遊可なり  
老翁いまま我をみるに  
さしきしや用輝志  
あひまきよなる五舌  
少翁さききやくし  
りや終る其所の翁も  
くや かしきありそ  
をわする翁の  
今を行らば  
志能るるり初使を  
家もあたりたり  
神前上  
舞と  
ゆる風の音  
みろく我  
らと押ひらる

出歌二反

しめんは  
とみく  
神多人の  
てや  
かしき  
は色  
くや  
たり  
あつ  
う  
樂  
さ  
竹  
来遊  
の  
ゆ  
ゆ

樂



乃松より紅梅松嫩小末より紅梅を  
 其れ成を句く入木の同すりまをさき  
 二ノ末を雨をさくりつるりり帝大と云  
 氣を贈り物より松を大と云り  
 乃松小名高き松梅の紅も世にの行末  
 ひさふみりきりりりりりりりりりり  
 松のなる天満宜しからぬ丹の花も松  
 とはなるもふりりりりりりりりりりり  
 乃の代りもさきりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり

出羽紙

乃色もみりりりりりりりりりりりり  
 乃松より紅梅松嫩小末より紅梅を  
 其れ成を句く入木の同すりまをさき  
 二ノ末を雨をさくりつるりり帝大と云  
 氣を贈り物より松を大と云り  
 乃松小名高き松梅の紅も世にの行末  
 ひさふみりきりりりりりりりりりりり  
 松のなる天満宜しからぬ丹の花も松  
 とはなるもふりりりりりりりりりりり  
 乃の代りもさきりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり

赤糸

乃色もみりりりりりりりりりりりり  
 乃松より紅梅松嫩小末より紅梅を  
 其れ成を句く入木の同すりまをさき  
 二ノ末を雨をさくりつるりり帝大と云  
 氣を贈り物より松を大と云り  
 乃松小名高き松梅の紅も世にの行末  
 ひさふみりきりりりりりりりりりりり  
 松のなる天満宜しからぬ丹の花も松  
 とはなるもふりりりりりりりりりりり  
 乃の代りもさきりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり

白樂天

乃色もみりりりりりりりりりりりり  
 乃松より紅梅松嫩小末より紅梅を  
 其れ成を句く入木の同すりまをさき  
 二ノ末を雨をさくりつるりり帝大と云  
 氣を贈り物より松を大と云り  
 乃松小名高き松梅の紅も世にの行末  
 ひさふみりきりりりりりりりりりりり  
 松のなる天満宜しからぬ丹の花も松  
 とはなるもふりりりりりりりりりりり  
 乃の代りもさきりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり

宇栖とよく文字小字して是と云ふ  
三十一文字の海平の字ありしを  
初陽のありし毎の来ぬ向きてそり  
及ぶとよの栖あしやえつる宮のまを  
始うてそののゆき高頼の人またく  
及ぶとよとよたたりいふありそ海の  
濱のまのぬきふけしうきま何世七  
うとよありしやわ和國の内悟のう  
心なき海士人のまを種を習ひけれ  
連和風のまを遊ひ和字と云ひて舞  
うの曲も色もそらさそりまやう  
の遊ひもまやうくハ維のえん 誰か  
てして遊ばさよれまありハ此舞樂の  
多勢の海の名を龍のまを色を舞人  
を此耐りたりしの上まのうま海  
浮りつ海音楽をまのや 昔原

中雷序  
と被紙

と序

國心初り高代は山法のうらりの  
水のもう海り 浪のほの海音楽  
西の海ありしる思れ波回りを歌ま  
の住をり神まのののうまの  
あまのれり神まのまのまの神のら  
らりあえん程も日午を海にらま  
りまのまの神のまの神のまの  
うまの現れしる伊勢石清水か  
かり鹿湯に湯飯方執事お藝の巖湯  
の明神の湯湯龍まのまののま  
のまの海ありしる海音楽をまの  
まのまのまのまのまのまのま  
海まのまのまのまのまのまのま  
のまの吹とらまの唐紙をまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
のまのまのまのまのまのまのま





一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...  
 像を返す家小初平の人稀介の西行法  
 師... 又... 乃... 謹...  
 有... 之... 神... 皇...  
 皇... 帝... 道... 延...  
 皇... 圖... 密... 帝... 道... 延...  
 皇... 圖... 密... 帝... 道... 延...

氷室八

夏... 氷... 室... 八...  
 夏... 氷... 室... 八...  
 夏... 氷... 室... 八...

一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...  
 夏... 氷... 室... 八...  
 夏... 氷... 室... 八...  
 夏... 氷... 室... 八...  
 夏... 氷... 室... 八...  
 夏... 氷... 室... 八...



余女の年の暮をめぐりし山名歌の夜  
よ海く島水をかたかくとくみかく  
少水室の神も水をよめく日影をへ  
くさ水とともく清風を吹りて花の都へ  
ゆさそわき雪とちのきくく山れまを  
初も見たりくけいさやいそけ水のお  
とがあら前も嵐岩の郡指く佐也色  
日の中の君よは調あううりてたき

志賀丸

サレ  
りあま共出時ままのく和字は通りむ  
みてま今う海平を櫻の二日と平伝  
を船としてその人々を登の音りひ  
ひるあり林もあけし木のひさる露の色よ  
りうゆくま人の甲をたぬぬとや  
の人志ぬぬとわい込れ情とや  
後帝山の強くく山の井れあまの能の

思ひ家の海ゆきをおおる色なれや海  
まゆりぬぬとわい込れ情とや  
此御成やあ鴉乃道方比代のとてほひぬれ  
を二十文字の神も守護しぬりく無見  
頂相のゆきも感度をはぬり君もあふふ  
高氏時を樂としてまひ田満り雪のまは  
海へ鴉乃あ返と浪の色万葉の御書へ  
あうりきとくまもまの代ひる方乃  
まうくとれ顔直ふ後らひの藤南よ雲海  
西北より静しくを流るる中りうゆくや  
花も帯盤山松のちまうまうふ色返も  
是れ方の海まもまもまは地を勤り宮祀  
と感とぬいとやうまやとめく山嶽のく  
家路つづきのまかへん麻ま心成り  
何ぞはむつき共あるふ大伴の思きといは  
志賀丸代として此山の神も人やまも















つりきる 思ふ程のややづつとも安く語り

糸女社より此地を移りて入らるるませ

細多神の此社の末社と云ふ事や作を穿りし

神と思ふ下 神くさけは右程やちりれ神と

柄く行きの名神と云ふや成すはあや

わらまのりや神と云ふあふふふとつん

志ろの まつとありや青明れく月も曇

らぬ久々の元照神と云ふ極乃宮と額と

小水登れらるる神と云ふのりを晴く月

乃来りつるさまら終つと花よのれあふ

やぐ 今も神の作りくぢりハ

ほさぬまのりて神と云ふあふ恵と誠なり

きりや神やぐ 今もまれくさ手代と

守らざる者も馬場りてさゆりて花よの

あふらわうて燈行九百乃塵よありし神

和えり後もく日めさるる威えも秋たの

出被紙

丑辰年

く花もゆりて終る風ものとりゆる代のため

たらよ 思ふまじう云照神れ恵とさうきそハ

極乃宮井と云ふは 家よお節の神の宮

所小なる極乃の神とありりれ雲らぬ威えを

取りまぬの神もりらの花さかりケ月と

照さるる神く 雲と云ふは神ありし乃

平乃帯えしと拍子とりろをさすらわさ

雲れりきり 花みたりあき枝よむしほり死

ケルももかれ志らるる 池まらぬれた感

同 東南西北も音をぬ海のもれも色ぞあ

小登のまれらるる水よアのきをうけつ

志らるる極乃れらるる 花の指あり

は枝のらるる花鳥のまらまのきり

はらひだるるあふあふ 毛のまをり

小あふるやをれし神ありて世は日らる

竹せ鴻 十四

上月  
 年方天の如く其神徳もあは  
 る天女と現はるりませぬ人とも満  
 ちの如くぬ人のことなるの悲心  
 をたてて心買年ひきつう日  
 あり利き実ふたはる 引る箱  
 疑をありいそ海乃松港を便におもひ  
 あま小舟我り人回あふれを社壇のたひ  
 しと押しつういそ海乃入きぬいきぬ  
 水中へ入るとり白波乃立切り我の世海の  
 ありそと云捨くま海乃入きぬ日せり  
 志買の浦は海乃くしづく 祢の息あふこ  
 乃海乃のちの追はる異言くやと行もく  
 行生海乃うとあふく 海乃入きぬ日せり  
 鳴詔く日月をのりやきて山乃端出ると  
 色もく影もあふくやとせぬ 柱是を世  
 海乃とむくはを致い因を奇并天女を

天女  
七被一版

才富  
ワキ上

天女  
舞

早笛

舞飾

我事也  
 今月の  
 月乃輝くしぬ夜ぐとくも  
 面白や  
 又波乃海乃志買りまのい節にて  
 界れ神祇のまをり 龍神湖よあ現して  
 くのまも輝く金海珠玉をのまのい節  
 くのまも輝く方難くりきまのい節  
 天女乃のまをり 右縁の気生者諸  
 をあふく 面白や 龍神とあふく 國を  
 志買り ちひをあふり 天女乃宮中  
 海乃龍神ハ別湖水乃飛行して海をき  
 ちのまをり 大地乃むく大地の  
 ちの地乃むく大地のちの龍宮よん  
 て入るまをり

リ... 魚... いたり...  
 や... たり... かも... 雲... 入り...  
 志... あり... あり... あり...  
 つ... 信... 幸... 乃... 意... 趣... を... 悟... り...  
 足... 釣... 針... を... 穿... り... 穿... り... 穿... り...  
 小... 舟... は... ち... ら... 由... と... 辨... せ... ら... ぬ... と... 針... 小...  
 寄... 丸... は... ち... と... と... 小... 舟... は... ち... と...  
 せ... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 り... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 終... 一... 丸... の... 口... は... ち... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 せ... を... 穿... つ... つ... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 の... の... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 乃... と... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 久... 了... 乃... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 朝... 日... 程... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 三... 子... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

中入雷布  
天女  
天女二人

海... 路... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 き... け... つ... み... 言... う... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 お... ち... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... を... 遠... 地... へ... 送... り... つ... き... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 た... せ... たり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 二人... 丸... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 つ... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 め... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...  
 ち... の... 志... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

天女集



元 時雨も雲も霞も月も輝く玉の御殿  
 小なる外なる氣も我は我は是の雲のみ  
 きに近きこれ佛法も法を守り神奉地  
 十羅刹女此現あり上宮親美麗の女神  
 乃神々々々もつややく玉の并のり色  
 白あ神をなれ来遊の舞樂はなりや  
 上 天女年  
 まより此神さのうらみ願き日舞樂を  
 う神前にあゆみてまき舞あつり  
 乃とゆつ月も雲も霞も月も輝く玉  
 垣もやま神神あつりまき舞あつり  
 さらけ相好くまれあつり神徳さ  
 くらも志の志り飛 運來遊れ神樂高く  
 いらや歌のりまれ人とあつり人 扱神  
 樂の僕らハ住吉町 御務熱回を  
 三千世界れ此神の愛ふ歌向なりあつり

小玉の神をくくも面白や舞樂とつゆ  
 町もさつりまれりとも時雨も雲の輝り  
 なまて明立ぬ海龍王の出現や 作是  
 海龍王と我も也扱も毎年竜宮入り  
 祢の箱も小龍といふ神前も扱也 扱神  
 則あつりぬさつり海龍王の退き行  
 あつり海龍王と我も也扱も毎年竜宮入り  
 寺島海といふも名を平下中川  
 乃龍も神も我に見えぬと扱神あつり  
 おやまああつり世に八龍神年他も波海  
 サつちくぬくうほまひりまき舞は神  
 々虚空も爰満つてあつりたつり神は









色らまぐれ辨物天の威えをあらり  
 神統も五百千切の鈴と弁人と物語り  
 光同とつひまきとるてふみろの海も  
 一筋の破れぬ波もたつのは明神を  
 威と振日雲をふきあけにいやく  
 大地も満ちるる時天部八音も  
 乃ふよあらしき終つハ明神  
 志を成るるのう鴻根と也り  
 けりははるりくはと雲甲に  
 することを申にあらしはるる  
 有靴き鞆向の

逆舟十九

シテナシ  
 夏小舟七代あつりて  
 話作特冊と号の対小回常立  
 千五百秋瑞穂八重  
 ぬくわらふささくす  
 けりははるりくはと雲甲に  
 することを申にあらしはるる  
 有靴き鞆向の

とくぬ。道であつりて  
 たすくぬ。道であつりて  
 ひろくぬ。道であつりて  
 舟その回と号の対小回常立  
 今乃代逆舟をく  
 乃代たつりて  
 あつりて  
 山と号とつりて  
 はるりくはと雲甲に  
 することを申にあらしはるる  
 有靴き鞆向の

出被城上地  
ヨリ派山ス  
天女前庭  
へ同上天女

名九千早振神の系も名めしと云 祇園の地乃  
声てのこゝと女浪の教もねり 瀬原の神我  
ありと本傳はも成なりし 柳葉津の神我  
小なりて月の光もあしと名くふ入と云て矢  
ふなりしけ入と云て矢まきり 湯山の形  
のちみちりてきまきり 室にりし祇園地あり  
多葉芳えねぬりて 長吉也えしと云てきまきり  
く 上地 ちめ色や西くぬあれ山ろつらつらす  
紅葉の物の形 瀬原の神我の神我  
名もきまきりし神 和光もあしと云てきまきり  
あつた天津みそりし神 又も多葉山あり  
思ひもきまきり 上内 ちめ色や西くぬあれ山ろつらつらす  
や瀬原の神我の形 瀬原の神我の神我  
日乃光りせと云ては乃乃ほふと云てきまきり  
柳大日本國といはく神國より 柳の葉えあ  
の形をきまきり 和光もあしと云てきまきり

舞飾

流布の國をさつとやれ有るや 南宮や瑞  
命頂禰大日美玉也来 むく待時流待時  
舞乃みと流流待時をさつと云てきまきり  
名もきまきり 上内 ちめ色や西くぬあれ山ろつらつらす  
仁ろと云ては乃乃ほふと云てきまきり  
あつた天津みそりし神 又も多葉山あり  
思ひもきまきり 上内 ちめ色や西くぬあれ山ろつらつらす  
や瀬原の神我の形 瀬原の神我の神我  
日乃光りせと云ては乃乃ほふと云てきまきり  
柳大日本國といはく神國より 柳の葉えあ  
の形をきまきり 和光もあしと云てきまきり





鳴動する社なかりきれ 枉毛八木徳年申  
小贈宮きりれ 鐘直大は乃精意あり 担も此

君寵愛し給ふ死乃やまをたしきん

通力まとのりき 寧陽はなん 南無天祇皇王

我釵降兒と秘文をさか 駒あ糸の 産を

を翔つて 糸川さりと 忍兒の光をさるり

色か 髪をさるれ ぬまき 柱小れきと

鐘直乃指是馬より 行たり 利劍をひ川

らき 祈をさかき 明王鏡子 山越 忍神の

姿をがれぬれ 忍神の通力自具も先て

くばさるまろのつちをさるれ 遊つたは

此船とさひかり 六宮乃玉 塔小走あのをの

から 物とさるれ 行 劍をさるれ あけつ

はさるりまの 庭ふさるきと 忍子貴

死も息災は 此乃知く ともあき 守れ 祈

とあつて 忍神とあつて 祈さるり 祈つて 安

る 忍又とさるれ 祈さるり

九世 戸 忍

り 山に 忍地のいひやみむり 忍神國とあ

のりき 忍のまろ 忍の 忍は 忍は 忍は

方便とやりの 忍を 忍と 忍と 忍と

と 忍大を 忍珠と 忍鳥と 忍あ 忍さ 忍は 忍い

忍橋と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と

忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と

忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と

忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と

忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と

忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と 忍と









天女集

神あそびらちやふれを神樂の教を渡りて  
 屋後乃移とひりて下翻と舞樂乃秘曲も度  
 空より感應所小生ひたす折つる石思候や  
 南方方より吹くる風を異音薫して相害た  
 ぬひき金ま色をさうりやねりてねん初王位  
 規乃若規のやせ利利物乃ゆとくづく  
 我年竟乃都とく方後同語乃塵よまハ  
 了金昭あ都乃一足とひつれき 愚業の死生  
 乃若愚とすけ 地と又虚空に法年沙あ  
 ちてを 愚若海乃初悟とすひ 愚業淨  
 伏乃心連のま初とに之明と修行と回を  
 てり一死せとすれちうひとありて 二りり  
 けく 飛王位規回解美名乃海とみきくを  
 乃くありの山まもりのゆとねみたりあせ  
 指あふりてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ

金札 四五

出被一皮  
 衣辰公ノ可ハ  
 出被紙  
 他物ノ内産  
 又故ナリ

乃くありの山まもりのゆとねみたりあせ  
 指あふりてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ  
 まりてありてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ  
 乃くありの山まもりのゆとねみたりあせ  
 指あふりてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ  
 まりてありてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ  
 乃くありの山まもりのゆとねみたりあせ  
 指あふりてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ  
 まりてありてらゆる室も金乃奉れえりも  
 輝く千本は藤ぐのらうゆとえりくくせれ

毎節

西にわたるに代るまの東夷西戎南蠻  
 小秋乃也まのまのうをたの銀を網の君  
 乙まの海小成と守りれまの宮小たま  
 乙のたのまのしらたまの玉宸教さまの  
 乙すまのゆまのぬまの行まの成たまの

岩船 六六

<sup>上</sup>上 <sup>下</sup>下  
 四の向の時清肉く遊平子舟のあま  
 ままとぬるの寶の遠はまのりある渡の  
 乙のまの代まのまのまのまのまのまの  
 天乃まのまの岩舟まのまの神代の  
 我まの界にまの神まのまのまのまの  
 秋津鴻根乃竜神也まのまの神代の  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの

早苗

乙教まのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの

行端梅 六七

<sup>サ</sup>サ <sup>ホ</sup>ホ  
 乙まのまの天地まのまのまのまの  
 乙まのまの神明佛池の眞感まのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの  
 乙まのまのまのまのまのまのまの

九重の陳水乃多地あく王城の虎門と音り  
 竹の響をとりておをあの床に山陰の口も打  
 やせ白川の流風もられたる子響の常樂の  
 緑をあらとち庭の池水とたつて鳥を  
 宿の池甲れ樹僧はきく月下のつた人跡  
 柳のきくく花の匂なり見舞國法の移り  
 順道の縁をききまゝ石の鐘暮小解る  
 九夏之伏りぬたきて秋きふりとをを  
 吹の洞底の松の比一聲りあきとよふか  
 て上求き椀のきとみき池多よふら月か  
 けり化気はれ相とえさる東川流湯の時  
 命をせふとあらんそり 地 喜の来り  
 暮夜乃圓をあやめ梅のをれを色とす  
 みるるるの流るくゆわくくゆわくく  
 列るをさるる吉あててむうとるくゆわく  
 夕綱 中 八

夕綱 中 八  
 中ちも流た放の春の心とふ脚きく裏の  
 情の道も流の心流り知る六條の流泉  
 可玉通日流あらんかの寄り中宿玉の  
 さいり玉砕れたるふぞてて流車なり  
 夕ののあやめも足ぬ阿りの小家から  
 竹のつゆも吹りたる花のなもえり  
 みるる思ふ折とこ流とあらん人の心

夕綱 中 八  
 中ちも流た放の春の心とふ脚きく裏の  
 情の道も流の心流り知る六條の流泉  
 可玉通日流あらんかの寄り中宿玉の  
 さいり玉砕れたるふぞてて流車なり  
 夕ののあやめも足ぬ阿りの小家から  
 竹のつゆも吹りたる花のなもえり  
 みるる思ふ折とこ流とあらん人の心



ふさし 彦成宮子丸願ひの値おきころの光  
神ありこまひハ行とつあんとかくと思ひ音  
羽山原の松のやぶにふを鳴つるもその  
まひもや海月道より法も出るお  
さられのやうきて雲れまきまに火あきり

源氏伝巻 十九

サシ女  
ホ 皇子のぬき式部頼とを数く石山寺  
悲歌と称し親とわく汝お徳と兼まらぬ  
にまの伝説とき厚し科ありふれおの  
と暗廻し今逢物も縁よむうろと甲  
乃可致とわうしらのまをい寫し世明の眠  
とさまの南無やえ源より出雲成寺に覺  
ナ 柳桐壺乃の櫻とまけり法付のまよま  
ささき木れものことらふれつは樹の  
花ちぬ堂蝶れむりし世さいとむてお  
タ鳥の泉の命を殺しぬをる雲のむり

未摘なり壺より産きたるは賀の秋の唐  
葉もよりやまをぬく佛意あはひかろう  
柳のあいらしてけしを影の下 花らさ  
あを母まきも愛を離るるらうまぬ  
うれつら道ともやわすまわさるは流  
浪のまぬる浦とわく智恵明れわくの  
海もよるうろつまも何りあふ唯遠  
せの石なるくさる挽の通とぬく火柱の  
吹さくも雲のうと雲かたるまらら  
よの秋のゆきともまきく一む忠厚の飯  
ろく飯上品蓮葉のいとゆきくまともわ  
て膏の伝説もまう狂りもよゆき梅り  
えの白ひまうら我心席のうゆきまら  
ゆり其玉高のきあふ権乃えぬまら  
あたま梅権の陰おさる本がもまら  
けりし位と床屋の内おさるだのまら

かつと浮あまたあつとこも是も結珍の才  
 外へ一夢のうも橋を打渡り所の米字を  
 ねりて一南高西方沛地如米狂言締結を  
 少り於て世式アの後のよをたをきつと  
 とろろも又歸うらあうて口向を既終り  
 ぬらさる西白やまひん人らあつたあつた  
 心をももうと移れ 引源のゆあを  
 昂つたれらあつて我をきまん連り花を  
 えんきたのちや ちやあたを移りひり  
 アタはあハ教しあ ありは乃落つあつま  
 乃のきつともあつたあつたあつたあつた  
 やうしくおと葉をさうさうさうさうさう  
 を彼石山の觀世音アハ世せりあつた  
 乃の保れ物語是も思ふ夢乃をも人よ  
 ちるせん乃方便さ乃乃乃乃乃乃乃乃  
 夢乃の浮橋を夢乃あつたあつたあつた

宇女 三十

ねまの君は人共志れくの松ぼく中にわ  
 きて宇女の夜夜うも思ひあつたあつた  
 過ははまの川まは女よまをいひあつた  
 うらにこころをいひあつたあつたあつた  
 けくさくいあつたあつたあつたあつた  
 小徳のみらのうれあつたあつたあつた  
 ともねらとりあつたあつたあつたあつた  
 きれはれもあつたあつたあつたあつた  
 小童女あつたあつたあつたあつたあつた  
 露れ情小こけ教感あつたあつたあつた  
 ちのあつたあつたあつたあつたあつた  
 人さあつたあつたあつたあつたあつた  
 ちのあつたあつたあつたあつたあつた  
 ちのあつたあつたあつたあつたあつた  
 乃袖あつたあつたあつたあつたあつた

乃物くも末女乃衣れ矢とつて必官人の小忌  
 衣極そつたふれたんげあもくねんをと解  
 志あやをのほ舞秋の曲指るとり入初とひる  
 叩して遊樂妓然るる末女乃衣うたふら  
 ち忘れや曲水れ妻乃有時市ち忘ぬく  
 四り方のの月つらも山屋とまきん所をい  
 思あるに敷急をうけて遊樂月月よかけ  
 上月よなをむの雲井のちと手乃 天澤と  
 ら物乃万代迄よ万代を流る物とわぬ衣が  
 つも流るぬ志ほめくなす私乃流れ歌  
 うせとくく正木乃うらふわつてさる馬  
 乃流絶の天地せくやうよ國を安穩よ海收  
 指あつて猿坊の池乃面らる浪の池志西よ氷  
 溜くうて傷まらぬあくそりそりやせぬ全  
 雲起つてあきさうらうと打あつて遊樂の  
 ちあつて先深あめのたふあきと井あとか  
 小瀬仙家の因縁ある物とあつて端をせぬ  
 屋やこつて又浪よあまきりまゐる波の底ま入  
 あまきり

野宮 元一

會者定難のあらむをよりも舞うてや後  
 乃せとほあつてなれぬいきり 想もあつ  
 ぬ牙れ露の光深ゆれわりあも思ひくふ  
 巾さ通ふ あら乃ま志のあつて後まゐ  
 絶くの中ありふらなまあまららひり  
 小思ひをてあつて流るけすの言よ介入  
 終あつて心とあつたりきりやあまの程皆  
 井とあつて出乃色しあましく小松吹流志  
 郷者にもあつてき道とらり秋のあつても  
 ちとあつてあつて君安小あつてさすあひ  
 流る情をぬて初る言成のあつてもあつ  
 乃思のうらふあつて 昔あつてあつてあ







一声賦

ちまきして奴もどき台威波と流と斗なり  
 音語り八坂返極る迄とて此のしるし  
 ありやん 我ハ惟もろ忠臣の松もさむとつ  
 田のたれが清をいと四よの竹清行くと白き  
 乃知とみよおの波東の 多る房りいさかや  
 家所の所をくろ 草堂のわたりハ伊多  
 云たをくまらるわさるる多あ爲祀の袖の衣  
 りおの堂の地はひふたりく 松れきと波  
 事乃く草れり松のまこはふは法と  
 て御もまらる波跡さうあり鞠きく  
 意有極れぬやわも明方にもぬらん遠  
 寺の障も透しぬき日所わると高の足  
 衣ききぬ夜月庵もまらるるさるに  
 主も思線やぬらぬのち花も遊如の動のる  
 ぬらる極方つらぬ四方の出天もくさる  
 せん けしめありさうの松といふに

一声賦

を便しく輪目のぬも知をとあす 無業せ  
 界ぬ法り色 佛事とあそむ 世の松の  
 糸のぞろ御袖 刺糸もかひる氣色を那  
 松杉松らぬと尋いん 寺宮向る法の場人法の  
 ぶなはあ 法れ教もつら行のせうや 前佛の  
 心ぬ ぬらぬいまああり 身の中問ハ法世り  
 四りや 種も御さる 鳥も音とあく 志も  
 乃川ぬ夢初の一願のしうらぬも有まぬ  
 て人問も 界吹をきる 夫も海へ浪の  
 つ瀧のあはれ始り行とらぬと糸の神一より  
 おきさるらまらぬ 松の糸とはしあききと  
 しむまらぬ失おきりやうし松とあきる

なせぬ 亦三

ホの海に玉の緒よ池のいさぬあうらぬ  
 とあよりなる心乃秋のねとまほおころり  
 契りて又のれくの中と成て 昔の物を思ハ



善痴りの水方極やあらうりや佛平お説  
 如一味雨地気生性所交多同 法覺きよ方の  
 た後の之居たよめう節道も亦一の定家  
 うらよ方とさうらうらうらうらうらうらうら  
 廠より種や唯と讀誦志終る薬を吟品  
 ぬふ甲いぬふや世妙曲よとけく草木れあ  
 りまの概心のうらうと柳をぬきて仏道めき終  
 之下 かく右種やまもく是うめめ法忠  
 てる人ホおまぬき露のめくさうきき かく  
 とかくうらもめさ 一味の法法の雨のさうり  
 皆うらひびく草木同法書皆ぬのまきえぬ  
 せの定家高もぬぬほろくさうらひら  
 こぬぬさうくと多弱車れ大老さうる右種  
 けよ世報恩ぬいらくらあうらと舟のたれ種  
 首と今ふたぬぬさうる船のまきえぬ  
 ともなる常乃 かく柳やか おとをり常の有  
 けぬぬか かくぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 うら世乃ハ 月れぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 うらうらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 皆てもつらや高乃ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 けやうらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 可よぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 めやや定家ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 つのぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

の口 亦四

ホカ  
 ありぬぬぬ中天上の善果さうくとつる顛倒  
 迷妄して未解脱れつとさうらぬぬぬぬぬぬ  
 ハ種り悪執よ薄して愚よらぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 善心ありぬぬぬとさう ぬぬぬ我うたまく  
 受ぬぬぬ人牙をさうらうとつらぬぬぬ業深  
 きぬぬぬとせぬぬぬとたりぬぬぬぬぬぬぬ行を  
 流まのぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ



極くのさうめん前よむるやふかき夏た  
 き秋くる風の音信庭門からくえりよ  
 きうよの秋林とまつとあけの身をか寺の  
 行り草あふととれといふと色花の露り  
 ちふのく色花散れとるくも露を露の身  
 ちやうと可あさ出る音のよもきり色もの  
 心乃林とともあさり替へんれりや思ひ定  
 りあさいん色花散れあすの中も小鹿の  
 ぢらねあさあさああぬん思ひり  
 乃山あさあさ唯月さるう体い別あさ  
 志乃の音越す志きき小海思志のよわ  
 思ひきまふ神志さういさあ久えん  
 月も志ろえ思ひこほりの夜志ものさあ  
 霜乃さあ露のぬきさうよいり草  
 乃秋もさあさのさあわさうしめの羽衣あや  
 是もさあさのさうて秋う夜

色花のあされれさうくとあさあさ  
 志乃のあさあさあさあさあさあさ  
 乃ろあ露乃さあ山さうねれあさあさ  
 露もあ露もさうくよ色さあさあさあさ  
 ああさ色花あさあさあさあさあさ

楊貴妃 六六

楊貴妃 六六  
 楊貴妃のあさあさあさあさあさあさ  
 乃ろあ露乃さあ山さうねれあさあさ  
 露もあ露もさうくよ色さあさあさあさ  
 ああさ色花あさあさあさあさあさ





とうり思ふも尊らお借養子と何の思  
 ひつきてとろふ徳も初れ初れと  
 せぬ海軍此所を見うりゆりゆつて  
 さまのきこせおの親せよとの徳つ  
 けまはるる前よりよ徳をけりて  
 すは海軍此所をこは實してし  
 方人よふともそれとてふと  
 志すもつとふふあひあつて  
 不勢れはるる徳とてけり  
 多定りぬ海軍此所とれあつて  
 徳つとてふと徳とてふと  
 ばつとてふと徳とてふと  
 あたうりぬ海軍此所とてふと  
 思ひつとてふと徳とてふと  
 せつとてふと徳とてふと  
 つとの鳥つとてふと徳とてふと

千

東雲海軍此所とてふと徳とてふと  
 とうり思ふも尊らお借養子と何の思  
 ひつきてとろふ徳も初れ初れと  
 せぬ海軍此所を見うりゆりゆつて  
 さまのきこせおの親せよとの徳つ  
 けまはるる前よりよ徳をけりて  
 すは海軍此所をこは實してし  
 方人よふともそれとてふと  
 志すもつとふふあひあつて  
 不勢れはるる徳とてけり  
 多定りぬ海軍此所とれあつて  
 徳つとてふと徳とてふと  
 ばつとてふと徳とてふと  
 あたうりぬ海軍此所とてふと  
 思ひつとてふと徳とてふと  
 せつとてふと徳とてふと  
 つとの鳥つとてふと徳とてふと

千

波さくさく響く八橋の雲井れ都の  
 うまの三行の四やまの御りく相模しす  
 きく明もまも人早月夜ぬくま入  
 ちほくき湯うると思ひよあふれも夜も  
 ちのひねおれ首と思ひ書り燈暗つてそ  
 政のりりちんこの雨は志うる水門を  
 里の楚歌の色れし行ちたれまの神廻  
 の色やわぬ質夜とうくと口はも空のさ  
 えの極きたる都の卒千凡神のくはら  
 移りしれちん 言まや 一樹の落や  
 一行のりみも他せの縁とつちち物をも  
 う眺むき 其時ちまひく具よま  
 琵琶を引せやち 終つまい 殿よ  
 合よんちまきまけハ 卒乃松のつひま  
 小たり琴と柳のけりよりうたぬ 夢も夜  
 ちくちのめとほのくと明わつる空の  
 ちくちのめとほのくと明わつる空の

年

まつちありなむは酒まよやめれおれ心の  
 ちう痛りきくつて空衛和よりり  
 又都あちちくはのぬ守護 山は  
 ち手もほくさく竹平のうら 契り  
 きぬく小引をぬる神とく 露の  
 お空衛乃ち極りもあて ぬ色

井心同 九

且此を紀の右常り娘と契り 時背り四あ  
 ちらりまみ行の四たもまの室も  
 人ありて二道よあひく通ひ終りよ  
 きらたら白波まのあまも君の橋ゆ  
 らんとあつらぬのまも 道行ゆ思心  
 とまきくまもれ契りけりまあり 心  
 ちるうかこのちまのまも けりあり  
 ちり此國は人のあきさるるをちりて門  
 の前ちつちまよりてうむしれぬちり

らひくたひひ影と水鏡面映りて袖その  
き心りも底のわくくはる月日も空成く  
影をゆくはらりくくはる月日も空成く  
後飯まめ方さそ女の露の玉章の心りたも  
色をひくくはる月日も空成く  
けたよききかふとんさる海あも備て贈り  
きくはる月日も空成く  
のさぬきかふとんさる海あも備て贈り  
ひよ讀くぬれわづ井筒の女んはゆい  
有帯り娘りちきあぬるへえさやあり  
物語のい妙ゆる有極のあやな名ふたりま  
せ城を我多意衣純乃有帯り娘ともいさ白  
ゆの立向のよふ娘もくあつたさかき  
伝多能のいさようわら紅雲あり紀の有女  
の娘ともいさようわら紅雲あり紀の有女  
後ゆりといさや志り娘りちきあぬるへえさやあり

早

二十不織

年八つ井筒のつづの法ふり流きり  
文飾や在窓寺のまら月づく昔とと衣  
平小夢ゆとくうわ花若り山あふ柳  
まねの人もまきりるやうも流も我れ  
ま人侍もいりわあり我つ井筒の昔よ  
さまゆと柳う年とくわらあもせま  
平れ道りあそ牙あぬくまうりや昔  
男よりうり帯 けさささの袖 けあふ  
まて昔うを在窓門の寺井まらあ  
月うはちまきりく 日やあぬまや昔也  
娘りも竹の比をわら井筒のあはる井  
筒よりあきりたをさるたふまきりか  
おたふきりるやらあきりる昔男の  
冠あきりるやらあきりる昔男の  
面影いれあきりるやら我りる昔男の

平

若亡婦... 安を志はる... 花の池...  
 かくて白ひ... 在念の寺... 鐘もほの...  
 光朝... 寺のね... 成る... 夢... 彼...  
 とき... 醒... あり... け... 破... せ... あり... なる...

如女四十

夕乃... 思... 妻... ぬ...  
 ち... 鐘... 響... づ... 明...  
 ぬ... して... 国... 月...  
 き... 志... 物... ぬ... び... て... 木... ぬ...  
 ぶ... や... 翠... 恨... 紅... 玉... 物... ぬ... 床... の... 上... ぬ...  
 ー... ぬ... ま... り... ま... ず... も... 同... 穴... の... 花... 夢... も... ぬ... け...  
 ぎ... も... ね... け... 世... の... 命... の... と... け... り... も... と... づ... け... 違...  
 草... の... 露... り... ま... も... 此... 理... 異... 理... の... け... り... け... ぬ... 心...  
 宮... の... 私... 語... も... 作... り... せ... 偽... して... せ... り... 世... 邊... 漏... と...  
 ろ... ぬ... 法... ま... ても... 我... 妻... 乃... 枯... り... り... ぬ... け... ぬ... 心...  
 け... 乃... ぬ... け... ぬ... 心... ぬ... け... ぬ... 心... ぬ... け... ぬ... 心...

如女

夕乃... 思... 妻... ぬ...  
 ち... 鐘... 響... づ... 明...  
 ぬ... して... 国... 月...  
 き... 志... 物... ぬ... び... て... 木... ぬ...  
 ぶ... や... 翠... 恨... 紅... 玉... 物... ぬ... 床... の... 上... ぬ...  
 ー... ぬ... ま... り... ま... ず... も... 同... 穴... の... 花... 夢... も... ぬ... け...  
 ぎ... も... ね... け... 世... の... 命... の... と... け... り... も... と... づ... け... 違...  
 草... の... 露... り... ま... も... 此... 理... 異... 理... の... け... り... け... ぬ... 心...  
 宮... の... 私... 語... も... 作... り... せ... 偽... して... せ... り... 世... 邊... 漏... と...  
 ろ... ぬ... 法... ま... ても... 我... 妻... 乃... 枯... り... り... ぬ... け... ぬ... 心...  
 け... 乃... ぬ... け... ぬ... 心... ぬ... け... ぬ... 心... ぬ... け... ぬ... 心...

うき花傳はもきうくつ風乃音玄の香  
 地吹くの英りおきうくつ和乃初見の扇  
 ありの想うつたりくあつあつみいあり  
 きううやあの子とらへきうくつあつあつ  
 ううあをく

二人辭 四十一

海路のふりとの風乃音玄の香  
 志の天令のつとつ和乃初見の扇  
 あつあつとつとつ和乃初見の扇  
 山吹のくつとつ和乃初見の扇  
 けまのふりとの風乃音玄の香  
 ううあをく

かきく想うたなむいきらくつあつあつ  
 ううあをく  
 とつとつとつとつとつとつとつとつ  
 のすあつあつとつとつとつとつとつとつ  
 ありの想うたなむいきらくつあつあつ  
 ううあをく  
 とつとつとつとつとつとつとつとつ  
 のすあつあつとつとつとつとつとつとつ  
 ありの想うたなむいきらくつあつあつ  
 ううあをく  
 とつとつとつとつとつとつとつとつ  
 のすあつあつとつとつとつとつとつとつ  
 ありの想うたなむいきらくつあつあつ  
 ううあをく



留とぬん先思業有く山賢之今此西身

ありか板の事多波運もつさるとある

と一平渡邊福徳と叫叫ゆゆの太乃成

志ふ君西海より平家と亡存しけり子

今と何と仰事なり名水也とゆふ

引く是の種り也ゆふも秘事の海の立片

さうらふみちを引くちくとゆふゆふつと

舟とゆふもさる忌野ゆゆゆつてお

の武庫にちりゆつらう歌より唱をらす

舟よ海ゆゆ海ゆゆつらう板もゆゆ

心中より新念ゆゆゆゆ我為教海ゆゆ

やりゆゆてゆ何ゆゆ板ゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆ西國ゆゆゆゆ平家の一門とゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆ也ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

早苗

ゆゆゆゆだゆ思ゆゆゆゆゆゆゆゆ

本ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆ一朝ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆ天皇九代ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

年節

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ







つとてはたしなむる法乃場所宛りやまのゆ凡  
と此水乃ちも井のつとて法法を相とひるま  
は草本國を皆地ひの土地成るく

名節辭 四十五

サシ  
おろけふぬ列宿の神道をむと申細家  
抽きて私のよりしらるは御人懐中  
とも神をるまのりり工宿り候あま  
静々師の袖も増くはるり候ま  
彼を幸り候といひのさうあれ成る  
名  
押景時りり候言り又あり候  
汲邊や流る水のみら垣乃運槽をそと  
うれ船れ櫃取りあり事ゆも也順義に  
さぬちり候はし義彼はちも治り  
昔登の神乃物まの真身何ら朝朝也  
まう知るが体は身義経志のそはの初  
とうきれく腐の西南は是を國と成つ

依河乃あふり元彼とくはるしよ路一坂  
後皆作乃し袖も恵と成りまはる一完賢  
玉恵乃りあふりまをよとくはるしよ路一坂  
中乃様いさしとるはるしよ路一坂  
まはるしよ路一坂  
いへ八行固まはるしよ路一坂  
あふり精也り人くはるしよ路一坂  
まはるしよ路一坂  
あふりりせれ様や志乃  
まはるしよ路一坂  
まはるしよ路一坂  
とありきりあふりり武勇ふと申ては  
義徳を及たしとて余議を那乃は後  
も有きりあふりり生君も今も  
たはるしよ路一坂  
まはるしよ路一坂

都へていりりきれ

雲雀山 四六

秋あやまらう言まらぬほころひま  
 躑躅あ遊の人けりてはちかき  
 身の中胡蝶のあをいふ言よめて  
 是ころのたのしみや  
 乃友春れや惜し山登りさるる色あやめ  
 秋のけきれい夜久しきや  
 まはらうりいふ言まらぬ  
 冬も雨のふさふさ鳥の鳴き声  
 遠よりいふ言まらぬ  
 冬も鳥の鳴き声  
 乃志けりいふ言まらぬ  
 人多くあやまらぬ  
 あらぬいふ言まらぬ  
 かまらぬいふ言まらぬ

序の年 十月

ていふもあやまらぬ  
 きや高岡の山を登つ  
 びるあやまらぬ  
 づらばいふ言まらぬ  
 病もあやまらぬ  
 身もあやまらぬ  
 身もあやまらぬ  
 鳥もあやまらぬ

松風 四十七

下月  
 松風も雨色袖のこぼれ  
 冬もあやまらぬ  
 松風も雨色袖のこぼれ  
 冬もあやまらぬ  
 松風も雨色袖のこぼれ  
 冬もあやまらぬ



我わとまひとくきひはくいと海の中くうら浪乃  
 音のし海乃うらわきく吹やうら山たわ  
 開路乃鳥もこぬくよまも後句くおもわと  
 ち村あるときく色乃朝えぬねれしうりや  
 のこぬ覺く

無師 四十八

花前お蝶舞紛々を柳よ小鳥とけ行  
 そる空に流る流水小池つと音乃あき事  
 鐘を寒き雲を濁る色のする事遊しき情  
 水寺の鐘乃聲御園椿今とあうり諸行無  
 常乃とちや燈地ま指規の花乃色留る双樹  
 乃とらり也生者母滅乃世のわらひさたあ  
 不悔い他もえり捨よあぶらほら雲よ上ん  
 響乃た山の名と砂と寺ま桂乃橋柱  
 くの岸れやちねああるぬま橋乃御園林下  
 系乃南をりうら小池まはた悲権誰の薄雲

す年

然も指規乃うらうらもも同くわらぬ  
 乃稻荷の山れと池のあをのり  
 み花のまの清水のりちれり類とくき  
 ちれた雲 山乃名れ音ねあうり花の雲  
 情乃情と人あうり 外あつ御ま村ぬのて

鐘あり

早月

花のぬゆいりふ ちる村ぬのあり来て花を  
 ぬいよ 志乃の村ぬやかま雨の あり  
 ありのく 橋たぬと情まぬんやあは  
 ありありきぬるとの花ぬあきこれハあませ  
 ち部のまも情まぬ ありありあまの  
 ぬえん ちる道たぬりぬ也早とぬさ  
 東より見え 竹乃のたぬや 中との  
 ざくざくぬる ありあはるやたんとや  
 先観音乃山利せあり 是返なりやうき  
 やかもまをくありやあやかひて都よ  
 ちるまはちやあまのりかすたはあふ

此とぬれぬつきの鳥くわくありまらり  
 て行道の種くやとよ逢坂の陣の産  
 一色心志く明行部山みきと記をん  
 作る原金りるを執踏我ハまらあつまら  
 なるゆり

高野の記 四十九

此の世の世の徳可くして結界清浄の道  
 場たり中よ此の結の松は日二年の帰朝  
 心前よ我法成就満地の命よありまら  
 とく三銘とあきらせぬりよまらとよ  
 来り世松の枝の指よまらまら 此まら諸本  
 中よわまら松よまらまらたたり十代  
 未なりてふらわらり此方便まらく回  
 たりたりまらまらまらまらまら  
 此の世の世の徳可くして結界清浄の道  
 場たり中よ此の結の松は日二年の帰朝  
 心前よ我法成就満地の命よありまら  
 とく三銘とあきらせぬりよまらとよ  
 来り世松の枝の指よまらまら 此まら諸本  
 中よわまら松よまらまらたたり十代  
 未なりてふらわらり此方便まらく回  
 たりたりまらまらまらまらまら

此の世の世の徳可くして結界清浄の道  
 場たり中よ此の結の松は日二年の帰朝  
 心前よ我法成就満地の命よありまら  
 とく三銘とあきらせぬりよまらとよ  
 来り世松の枝の指よまらまら 此まら諸本  
 中よわまら松よまらまらたたり十代  
 未なりてふらわらり此方便まらく回  
 たりたりまらまらまらまらまら  
 此の世の世の徳可くして結界清浄の道  
 場たり中よ此の結の松は日二年の帰朝  
 心前よ我法成就満地の命よありまら  
 とく三銘とあきらせぬりよまらとよ  
 来り世松の枝の指よまらまら 此まら諸本  
 中よわまら松よまらまらたたり十代  
 未なりてふらわらり此方便まらく回  
 たりたりまらまらまらまらまら

とひつりゆるらき人 歩をゆるさせぬ水  
ひりて

六浦 五十

先青湯の春の始は青妙なる梅うえのつり咲  
そのく諸人の心や春山成ぬらん みる梅の初感  
唯雲のこころ三吉野のちやなれたるふとく多句  
夕月日経て移まらくるあうめか梅の影 庭  
の西に咲はばくさる卯のたけ垣根やをよぬ  
ふん所うりあたるは枝とまにぬぬれぬ  
定あけの村時雨さのつらうはすゝめ成るも  
ちられぬらるるはあゆみぬ色とや けしき  
とわはまの奥の山室におうら内から都人  
の寝もほきまされぬの露の情にむらむら  
海とまゝえうとくふらばとくふちくのえん  
海さ清浄をらつきたるは果とらうり流るや  
あけ月乃夜遊をり せめき袖をさるる

太く

林乃夜れを来と一夜ふがさのても  
あゆりてを来あゆり 八色の鳥もねんふ  
小色の鳥とひくふ鐘も圓ゆる 明るのそん  
可き古浦のく風山く勢吹あゆりくちね紅紫  
をり月に照さゆりくちねあゆみの屋れさもあ  
を和くづくあ申て海山路まゆりと思つ木  
る乃月れゆりと思つ木山乃月れくきあす  
りとあまをり

羽衣 五十

越る小月宮殿のち極まきりくぬの志ゆまこ  
なうて白衣黒衣を美人れねと三五ふりう  
一月夜のあけし月れうらの身をまきく彼  
とねあつたむし月れうらの身をまきく彼  
東乃まきり舞を舞つる曲とりやまを霞  
をれひさまり久々の月れをうりねやま  
きりたうら色めくはれ志や 高白やま









夜の鐘の響ききこえぬ 志の如く情の如く遊

やふらむゆくゆくゆきまは時あひるまはあふ

ゆるま宵一列僧の心は清き月あけの春

冬三序

の木の 花のつきり明りゆく 夢の如く

ぬめりゆくあまのつとむらさき 夢の如く

あふゆくあまのつとむらさき 夢の如く

花ありきりゆくあまのつとむらさき 夢の如く

ゆきまのたつゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

翁らひゆくあまのつとむらさき 夢の如く

遊行柳 五十五

ホ 別れゆくあまのつとむらさき 夢の如く

やの皇帝のゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く

おのく惜みゆくあまのつとむらさき 夢の如く

さめゆくあまのつとむらさき 夢の如く







梅の露の白き月をさらき安んじても僧も言

葉をひたひたり 雪の降りたるまどをたのむ

うたを聴かぬ心も 舟もきて唐土の舟りかあ

たよも夢の心珠のまじりつらうき世の中

うあらはれぬまのまの世をひろくらんらん

あをけつらふと 光原のまも心珠の赤人も

あゝ知のよあさるる今夜月かみよふゆゆ

あゝぬのきぬとらきつね いたすの心珠をさるる

まに秋まらぬまのまのまのまのまのまのま

語りとささるる月をけり入言のうらみめまの

本乃ととよやとらきつねのまのまのまのま

ゆつとさのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

うたはぬあか 秋まらぬまのまのまのまのま

らとさのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま

あつふか 人とらきつねのまのまのまのま





孝行と守り給ふに傳り言志は利せと依ね  
親も足手もむつすや中は是て寝舎より  
可きれ

錦木 六十二

申つたよりわりのふ程とむりとありせせの  
僧り作小池ひく織細布や錦木のも度百重とぬ  
あるもは執心の書 執心は違つて手跡  
よりて好めし一宗妙典の切りとえと懺悔の書  
中ふ程をぬきあり 和の錦木とてふ女は  
細布も織出り音もよき同造りうわけと  
だつひ内外あつうとわぬわぬ中垣の草  
えんはあつうとわぬわぬとよ明され  
之ぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は

分則版年

ありぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は  
よりぬりぬき程お思われぬと積りて錦木は



ついで山野海舟日記つゝあつた其の鏡乃神柳の  
 志く深もぬり上つ時舟の舟よりいひ候はしゆを經  
 有時山登れる時みみぬきの中ノ海より  
 ある夕浪れまゝ音やと海明なるものありて年の  
 程もかく敵をこゝをひく世の志動もつゝ  
 びりまゝの世方れりも何とつゝ因果をやまらば思ひ  
 事叶はぬれりし世もれはれれらるるに候思ひ  
 つゝいあひさゆゑの道ありて苦くそ候はるや  
 まゝ世ありては遠きを東南より言ふと西山の  
 ゆゑに色も責むれ埋るるべき所を理り候はる  
 ろよ唯世に非も佛をまぬらぬる候り  
 き世もあゝ恨りれりきよや こそ是も心あり  
 人の情は盡ふべき心もなきもあはれよつゝ  
 こそ人よあはれりやれんをり あはれんかめん  
 老人は市度よめり候はれは山陰のちやをり  
 りりと因后して可も山路り菊れ酒とのまら

別年

西白鳥山水記の巻のうへては流るひりく曲水  
 の岸まらりしは初めはくいはち海をまらり  
 舟舟ありて塔の遊僧まらりて年の時り知舟は  
 山ありてありて巖よりいひ候はる こそは脚  
 水 ちの船りつゝ日をまらり候はる こそは脚  
 ちのたやや舟りつゝれ心ゆゑは舟舟のんを  
 ちのたよまらり候はるは舟舟のんを  
 ちの毒地りつゝのりまらり候はる こそは脚  
 こそ

盛久 六十五

あつたは我流を流るを頼む日お細言を急ぐは彼流  
 と候請ふしつゝりわき流時節 利候も迫り候思  
 つゝり時急るるを候 知あり候後の一息  
 まて 昔然りて候はるるは こそは脚  
 ちのたやや舟りつゝれ心ゆゑは舟舟のんを  
 ちの毒地りつゝのりまらり候はる こそは脚  
 こそ



志う思ひありし情有難や御りりうれさふ秋  
成法約ふささうりく時家とたに夜言り

相三  
男平

少たはを御もはきまぬるあさうりりきた  
進多やうむに暇申てゆゆののの三つイ  
志折をえく年未れ御本やと遠んとたひい  
男噴志のほりか胸れ煙を富士たりよたり  
て月とききふり用よゆあいの名をさあは見  
才親孝行りをりよあうんりりり

小野 六十七

たうとささもねるぬかありぬ事ゆゆも  
味背り道ふ満なさゆ溪王のを山り其泉飲  
志の思ひまきあや白月の大乃糖も後ね  
面影もあうらほあき暮れ色中くゆ瑛の

唐帝の支心跡山宮り私語もゆゆりと尋  
ふよあある露を御芽生や袖ふ折り秋を  
霜を思ぬまのさあわれりつくと進ゆも志  
り心成多し人志國遠さあひの意を志まん  
作のあうてあさ世を思ひれ投くふゆりりか  
き志あうあささきたさてもゆまの志意の  
みくれ成と志思をらすたにゆの頼もも有  
明り月れ言古りゆ遠色歳あまのりゆ恵  
いとも惜るき初たれた岩もとゆまてゆとい  
いりくあうあうは是遠ありやらうなそあれあさ  
鈴くうとゆ那申さあや月あゆあうゆのあ乃  
せふ先や湯りれゆつひれとりての名孫うと志  
ひく志あうあさうれゆゆりや星合れゆ稀  
あう甲なりとゆ年ああゆるゆあうゆ  
志毎車れゆと社あうゆとと志あゆのゆさく  
酒あゆのゆと志行り志まゆあゆゆあゆゆ





東方朔 七十一

帝くも意連右ふ仙人も位なる申採菓汲  
 水年坐仰て終よ成道し終りて大尊也と  
 言ひ終りて終りて終りて終りて終りて終りて  
 色西母と面るは西方極樂母皇聖奇仙乃  
 仁現るれん終りて終りて命れ仙人と成り目  
 さらん箇せしやうの世の三千年は一應  
 なる此本乃仙樂と成りて終りて終りて  
 仰るれ終りて終りて終りて終りて終りて  
 奇布長遠より終りて終りて終りて終りて  
 上付目終りて終りて終りて終りて終りて  
 偏解終りて終りて終りて終りて終りて  
 柞是ハ他師より終りて終りて終りて  
 奇布長遠より終りて終りて終りて終りて

申らんとあちひあり終りて終りて終りて  
 又サカリハ  
 又サカリハ  
 又サカリハ

樂相奉  
 帝乃神曲お終りて終りて終りて終りて  
 終りて終りて終りて終りて終りて終りて  
 終りて終りて終りて終りて終りて終りて

道明寺  
 二月下五日に終りて終りて終りて終りて  
 終りて終りて終りて終りて終りて終りて

二月下五日に終りて終りて終りて終りて





假定りたりいづの假をあらはすあり

相を辭とも叶のまに相をの中へかくる

いづるに座ののけやあきの五垣

やるとるの中に白きるの山の神

あやむ相子とくともいふもさるる浪の

多乃とらたさるるほとさるる相子八面白

りかすの山と年平の曲に七徳らとさる

七拍子勝を居しとくはさやまいさすりか

あは魔縁をさるるにさるる手にさ福縁

ま福も宇秋樂まは身年をひ百歳樂ま

命とのあは法乃巻とさるるの相に初上は

さるるに本徳樹をさるるさるるさるる

一木のぬれをさるるにさるるにさるる

席して假をさるるにさるるにさるる

あさつらぬにさるるにさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

輪流 七十三

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

あさつらぬの道明をさるるにさるる

中八音  
スル  
音



乃花袖をきくしき行きの秋とひくくも衣も薄  
きるり雲はく人の華樂りもくも富家羽衣の曲  
をのきは山行草花国去ゆいふ千代万代とまひ  
けつはく人か雲すくも雲とともやあふもくも  
長守初ふ若乃くもいひもをせ敷も還市か若乃  
目の度きれ

和歌  
七十五

エ  
リ  
國を安全長久の吉くも雲花もいふもあはれ  
ひのまはりもあなづきの菊のあなづきもあなづ  
先づもあなづきのあなづきの菊水のあなづきも  
さきもあなづきのあなづきの菊水のあなづきも  
ひくくもあなづきのあなづきの菊水のあなづきも  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
しむくもあなづきのあなづきの菊水のあなづき  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
水さりのあなづきのあなづきの菊水のあなづき

無

そわそわなりが明れしもあなづきのあなづきも  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
花のまもあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
月人月のあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ

唐歌  
七十六

父あざむきもあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ  
あなづきのあなづきのあなづきの菊水のあなづ



一日... 雨の神志... 増... 罪科... 老... 命... 歩... 色... 龍... 人... 今... 海... 人...

二七ノコス

小... 色... 色... 色... 色... 色... 色... 色... 色... 色... 色...

樂

引く天も影向 言はずも霞の天降るまゝの  
 色もよゆくすのうの教 うらむるまゝの  
 かく言水も流るる流とどつめりくけりもれは  
 引き竹の午向の舞あは有種やや面白の時をき  
 引く結雨樂のや松の色柳のたねつづ月も  
 涼を穿もあひりおまのれや鴛鴦の橋の元  
 引く紅雲のまに二星のやりの前よかを冷りも夜  
 と更におも樂ももる成り人同の水の南星の  
 北よたんとくの大川海つて雲の波立もあはる  
 水の堤の月も晴る水も歌も流るるうのち袖を  
 ほともやま遊り舞樂も時をく五更の二点鐘  
 とのめり鳥を八聲のはめくとも月もつとむ時  
 の教もつとつらもるるもよみか穿るる現る  
 夢もつとつらもるるもよみか穿るる現る  
 ありよきれ

梅歌 七十八

梅のりくめりは法の受物よあつて夏成り  
 花もよゆくすのうの教 うらむるまゝの  
 かく言水も流るる流とどつめりくけりもれは  
 引き竹の午向の舞あは有種やや面白の時をき  
 引く結雨樂のや松の色柳のたねつづ月も  
 涼を穿もあひりおまのれや鴛鴦の橋の元  
 引く紅雲のまに二星のやりの前よかを冷りも夜  
 と更におも樂ももる成り人同の水の南星の  
 北よたんとくの大川海つて雲の波立もあはる  
 水の堤の月も晴る水も歌も流るるうのち袖を  
 ほともやま遊り舞樂も時をく五更の二点鐘  
 とのめり鳥を八聲のはめくとも月もつとむ時  
 の教もつとつらもるるもよみか穿るる現る  
 夢もつとつらもるるもよみか穿るる現る  
 ありよきれ

ちうなり夜事樂をのりてん 心も去り優香  
 乃松の傍より縁山は 海日くゆり而後路  
 心も去りぬる海の日 音海波の浪を 心も  
 心ゆくゆりぬる行端の梅を雪月 心ゆく  
 花乃秋夜樂 心ゆくゆりぬる 梅元梅元夜  
 秋夜をよそとせし風 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 宮主南白や宮の心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 乃後みぬりぬる 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 今日前もよまの雨乃神是 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく想まぬる樂の教 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく思ふゆりぬる 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 月とつり音楽乃心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく

富士を教 七十九

心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく

心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく

心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく  
 心ゆく心ゆく心ゆく 心ゆくゆりぬる 心ゆく



樂

引く心ももろくぬがりぬるもあはれ  
 みそけのうらやととくを教うら  
 めや持てるもさくぬとてあつゝ  
 偏に教の傳たりてあわきなり上人  
 中たやと絶れぬまはれくまの節の  
 へ  
 と教とみそけを教はれぬもひくも  
 人乃年分れて教のやからなりや  
 ちむなりぬるもひくもなりや  
 人乃思ひぬるもひくもなりや  
 たふぬるもひくもなりや  
 千秋樂とうたふもぬるもひくも  
 家とくぬるもひくもなりや  
 可もぬるもひくもなりや  
 ままぬるもひくもなりや  
 ちたぬるもひくもなりや  
 胸乃まぬるもひくもなりや

ありきれ 是迄成やんよく  
 餘の安鳥うとみぬるもひくも  
 ちれ教のぬるもひくもなりや  
 ううううのぬるもひくもなりや  
 きる脚ん直てうううなりや

二笑

上青  
 二回守ぬる此處を於て是邦をぬるも  
 ちぬるもひくもなりや  
 りやわつてんや柳波明りは教の  
 にと事と十金印と三ひくもなりや  
 氣に私書を教のぬるもひくもなりや  
 山とぬるもひくもなりや  
 海に雲れ明帝の時仙の法を字山と  
 士とぬるもひくもなりや  
 内より進人といふなりや  
 虎山れ虎候も色なりや

露つりしはとくくをた記の薬乃のほらも  
 新舊代もつらき老れももとの心も  
 けしきいさるも白菊の花と若にままた  
 酒ねり年と若人の心もよしの代と高代  
 月の代と松のくき倒なり ねるるれより  
 少年と老れも縁のわく木れ取れね けまにせ  
 けしきいさるも白菊の花と若にままた  
 酒ねり年と若人の心もよしの代と高代  
 月の代と松のくき倒なり ねるるれより  
 少年と老れも縁のわく木れ取れね けまにせ  
 けしきいさるも白菊の花と若にままた  
 酒ねり年と若人の心もよしの代と高代  
 月の代と松のくき倒なり ねるるれより  
 少年と老れも縁のわく木れ取れね けまにせ

一首仙人 八十一

しら白  
 乙ら志はあつさく人鬼高まはねたもく  
 中乃乃月れ星をぐくうらなを身と山人のわ  
 袖白菊の露はらりらふらつた代をたねりし契

乙ら志はあつさく人鬼高まはねたもく  
 中乃乃月れ星をぐくうらなを身と山人のわ  
 袖白菊の露はらりらふらつた代をたねりし契  
 乙ら志はあつさく人鬼高まはねたもく  
 中乃乃月れ星をぐくうらなを身と山人のわ  
 袖白菊の露はらりらふらつた代をたねりし契







さめくみちほくまを成りさる

室君 八十四

エレ  
 山々の平くさる世に神をくぐりぬる鳥を  
 なるがくちのいりぬあましめく  
 エレ  
 此の山をみる人おきておとろえはを  
 エレ  
 あつた海をくぐりおきておとろえはを  
 エレ  
 平くさる人おきておとろえはを  
 エレ  
 てぬまき手しんぬる物をけしぬるの布ら  
 エレ  
 ささねの山のころあく日影も白あち地の  
 エレ  
 きもら舟をさるのきもらなると名しぬ  
 エレ  
 まる夏をけしぬる物とくふ言のやぬる  
 エレ  
 とく山白妙の物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 ちる書をすれぬる物とくぬる物とくぬる  
 エレ  
 てもおともさるの平くさるていらや遊ん  
 エレ  
 中のる山の物とくぬる物とくぬる物

おとろえはを成りさる  
神をくぐりぬる鳥を

まほしきは神樂をさるせうとくまてく

正位

エレ  
 まほしきは神樂をさるせうとくまてく  
 エレ  
 月くけるがくぬる物とくぬる物とくぬる  
 エレ  
 まうとくぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 つくぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 きもらぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 りぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 けりぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 とくぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 けりぬる物とくぬる物とくぬる物  
 エレ  
 けりぬる物とくぬる物とくぬる物

弦馬 八十三

エレ  
 人ぬきぬるの神樂をさるせうとくまてく  
 エレ  
 へ頼むる神樂をさる神樂をさる  
 エレ  
 へ頼むる神樂をさる神樂をさる









あふ南無三寶 名を教もつても第ひたりき  
 法管も小極楽の井ほつろの遊びとゆめあを  
 何とたつた行とてくちや氷と漏つて人畜法こ  
 此一め成さ相れつとふいふぬよく

自叙状七 六十九

いふの心密をとりて運はありのまことほ  
 すとまはれよ鳥はりの海を漏てさし手板も  
 ありふら管の帝のほりよ管の秋とつて士率  
 わりが財貨秋庭上り池の面と身履とわき  
 秋の末のよ実をいぬよちる柳のつば水より  
 びりふ又物とつてまきものほろよ落きつて  
 一葉の上よまつてつ葉くもらあまれつとつ  
 ぬも柳の葉をちるぬもらうりれけよよ  
 志秋霧のたらしる霧のわき舞をよもよ  
 うりうりたつみてあつてつてつてつてつて  
 おまねく鳥はとつてつてつてつてつてつて

エテ

こほりや代と治りぬかす一萬八千歳とや  
 此せハ私のまの字と君まことむとちたり相又  
 天をれ顔とまうのむとめ射よりぬあつてつと  
 ちのまもつてつてつてつてつてつてつてつて  
 顔鶴首とつてつてつてつてつてつてつてつて

とつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 家のつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 一とつてつてつてつてつてつてつてつてつて

らられはるる百のちあをららぬ竹よる扇のほ  
 福をいり合を是とてつてつてつてつてつて  
 下月

ららぬくちつ幸傍のねらよあをららぬとつ  
 まつたのまねとつてつてつてつてつてつてつて  
 年をよすつてつてつてつてつてつてつてつて

るなつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 てつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 とつてつてつてつてつてつてつてつてつて















一樹の流(河)の流るるを知らず可くあはれ  
 ひかり橋を是又他世の縁成りてや  
 て花の鏡と成水の影のや  
 ちいぬまはなわくたふ成たと思ひあはれ  
 かし我も夢なるを花のよみさうらけ  
 を指しあはれよ影ぬる花の影も水の色  
 とくは白波の花を影にさかひを  
 のやうに百千鳥の影をゆくわく  
 経のうやまの影をさかひを  
 ちいぬまはなわくたふ成たと思ひあはれ  
 かし我も夢なるを花のよみさうらけ  
 を指しあはれよ影ぬる花の影も水の色  
 とくは白波の花を影にさかひを  
 のやうに百千鳥の影をゆくわく  
 経のうやまの影をさかひを

ちいぬまはなわくたふ成たと思ひあはれ  
 かし我も夢なるを花のよみさうらけ  
 を指しあはれよ影ぬる花の影も水の色  
 とくは白波の花を影にさかひを  
 のやうに百千鳥の影をゆくわく  
 経のうやまの影をさかひを  
 ちいぬまはなわくたふ成たと思ひあはれ  
 かし我も夢なるを花のよみさうらけ  
 を指しあはれよ影ぬる花の影も水の色  
 とくは白波の花を影にさかひを  
 のやうに百千鳥の影をゆくわく  
 経のうやまの影をさかひを

きり堂の神前を鳴るる鐘き流りしれり  
 てさむらひさうりく母もたはげしき  
 縁とありまきり二世五葉のえんほき  
 親子の道り  
 ありのりきん

百万 九十年

午半徑衡より鳥雀枝の深きあつまるる世  
 中いあゝ海のはら行くや水の影乃果けり  
 紫の梢は霧乃古綿よ引く月を送るふらり  
 二世とわきありの契りれまはらうら  
 たきのあきさきあきと成果と比目の地を遊  
 紅よりれきしうりりれまき返りてわいのふ  
 き面よりわくも信人のたき流の深き水神の  
 かりと流あきよ思ひまわく年向を流す月  
 けき西のたきれ柳陰みりあゆむ白露の  
 別まきいつらんをくはるよきんちとあきぬ思ひ  
 夢と流の川せしあきまわりのたきあきの都をまわく

海りさきよほの川とら流りて山城よ井平の室  
 水あきのうて影うも面影海まきまありき  
 づて月日を送る身り羊のあゆむまの物まほ  
 きての程あ都の面とあつる流海のきまま  
 つる雪方の親あを詠まはらたのうら木乃龜山やん  
 ちの流りて大井川流りて世のさのわたりや成道行  
 山橋尻のわきねの尾小倉の里れ又霞たうつを  
 水高の袖のうらあきまき返りて群集まきま  
 乃流りさうらあきまきしりもきりも流りて有冠  
 きりてまきれりもわきまきあきまきまきま  
 後うまきまの連ひあゝ道ありてあきまきま  
 預磨りけりまき赤梅檀りまきまきまきま  
 視てて天竺雲霞見我朝三回よ流りまきま  
 よ現れりまきまきまきまきまきまきま  
 流りての流りまきまきまきまきまきま  
 流りての流りまきまきまきまきまきま







三十一...  
 三十二...  
 三十三...  
 三十四...  
 三十五...  
 三十六...  
 三十七...  
 三十八...  
 三十九...  
 四十...  
 四十一...  
 四十二...  
 四十三...  
 四十四...  
 四十五...  
 四十六...  
 四十七...  
 四十八...  
 四十九...  
 五十...

山歌 九十九

一畑...  
 二...  
 三...  
 四...  
 五...  
 六...  
 七...  
 八...  
 九...  
 十...  
 十一...  
 十二...  
 十三...  
 十四...  
 十五...  
 十六...  
 十七...  
 十八...  
 十九...  
 二十...

吾...  
 一...  
 二...  
 三...  
 四...  
 五...  
 六...  
 七...  
 八...  
 九...  
 十...  
 十一...  
 十二...  
 十三...  
 十四...  
 十五...  
 十六...  
 十七...  
 十八...  
 十九...  
 二十...  
 二十一...  
 二十二...  
 二十三...  
 二十四...  
 二十五...  
 二十六...  
 二十七...  
 二十八...  
 二十九...  
 三十...



唐渡天とさまり給うて五万の五万とさうり

摩那の護世伽那の成道徳を奉れ護法 懺悔林乃

入滅遠とくをさすもく 習く小伽那とて歸

四年の神れ若我の時風を修行してのさきき

神院まふあつてあつてさうり

しつりさうり 日替り心全き男とあり

くまもあも神とありさうり

時より地震動とて神界の神神りまをさうり

大龍王とて神龍王とて後神龍王とて

春属引つて年地小波瀾とてさうり

持法徳龍王とて 樂乾國龍王

恒那河僧王とて 恒那河僧王

白妙ありとて白妙ありとて

大雷第 湯同 出散 早雷 別也

佛

色とさうりさうりさうりさうり

ほの川つとてさうりさうり

冠とてさうりさうりさうり

大の野寺とてさうりさうり

双林乃入滅とてさうりさうり

唐とてさうりさうりさうり

さうりさうりさうりさうり

善界 百一

外よりさうりさうりさうり

観念の観念とてさうりさうり

悲願の悲願とてさうりさうり

魔境の魔境とてさうりさうり

さうりさうりさうりさうり



二思道をあらわすはも寛高の身とありて...  
仏教法教とあらわすはも寛高の身とありて...  
三昧れ輪と道とありて...  
此處をあらわすはも寛高の身とありて...  
山東をあらわすはも寛高の身とありて...  
つらぬまをあらわすはも寛高の身とありて...  
きよきりく 知とありて...  
と仰るまをあらわすはも寛高の身とありて...  
比敷をあらわすはも寛高の身とありて...

キハ高岸  
二ロイコス

己私の指れぬ思はるる...  
行本末震部 天のちり...  
雷を町をあらわすはも寛高の身とありて...  
作是るる唐の太極の首領...  
あつてく...  
きよきりく...  
りや能界り...  
ふまのふ魔道...  
乃ちより...  
魔道...  
二天...  
山王権現...

大八し

カケリ  
二版トシ

帯備

三悪道とやらも自ら鬼畜の身となりて...  
仏教法縁とやらも...  
心とやらも...  
三昧とやらも...  
色とやらも...  
胎を思ひて...  
まよひて...  
の利根を...  
はり...  
先...  
し...  
山...  
つ...  
さ...  
と...  
比...  
松の梢...  
竹...  
雷...  
柳...  
あ...  
さ...  
川...  
ま...  
乃...  
魔...  
こ...  
大...  
より...  
二...  
さ...  
唱...  
山...  
南...

あ...  
さ...  
川...  
ま...  
乃...  
魔...  
こ...  
大...  
より...  
二...  
さ...  
唱...  
山...  
南...  
カケリ  
ニ候トシ



あつた所ねまらぬから小太極とあつて山よ極のま  
るをふんぼくもききとる 4月

つとねまらぬまらぬ切極のまらぬまらぬ度いふ

作まらぬ御道とあつて申す人とあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

年例

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

車僧 百三

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

十八番  
八十三

山乃長雲にみだりありきりく 先居山あり

みたりきりく みたりきりく

小山師外 相車輪のつたに車僧 我行首らり者あり

らり と慢四門四踏ありとありんや 教くはきり法徳心

し 心引き輪のつたに車僧 摩道をも心をもよき車僧

吾思二河はありあり 仏法あり世世あり

煩悩あり 苦提あり 佛行はあり 元来あり

車僧あり お師坊の行者も有るなり 祈る

僧行 はらひなき いたぬは わらわら かくれり

わらわら 我が心 増え減あり 面白の時 希

ら わらわら の 心 あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら 我が心 は わらわら あり わらわら あり わらわら

つと わらわら 上 車 あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

わらわら わらわら あり わらわら あり わらわら あり わらわら

うきよきれ

大書 百四

上高...  
 村...  
 時...  
 は...  
 志...  
 子...  
 くら...  
 可...  
 に...  
 ひ...  
 る...  
 如...  
 ま...  
 神...

中書 大へし

上五太夫切  
早笛ニル  
又上五太夫切  
早笛ニル

華節

圓...  
 行...  
 と...  
 う...  
 の...  
 主...  
 ひ...  
 天...  
 あ...  
 マ...  
 路...  
 る...

善如鳥

十  
 少も... (mirrored) ...少も... (mirrored) ...  
 又... (mirrored) ...又... (mirrored) ...  
 七... (mirrored) ...七... (mirrored) ...  
 九... (mirrored) ...九... (mirrored) ...  
 一... (mirrored) ...一... (mirrored) ...  
 二... (mirrored) ...二... (mirrored) ...  
 三... (mirrored) ...三... (mirrored) ...  
 四... (mirrored) ...四... (mirrored) ...  
 五... (mirrored) ...五... (mirrored) ...  
 六... (mirrored) ...六... (mirrored) ...  
 八... (mirrored) ...八... (mirrored) ...  
 十... (mirrored) ...十... (mirrored) ...

カケリ  
カニ  
カニ

少... (mirrored) ...少... (mirrored) ...  
 又... (mirrored) ...又... (mirrored) ...  
 七... (mirrored) ...七... (mirrored) ...  
 九... (mirrored) ...九... (mirrored) ...  
 一... (mirrored) ...一... (mirrored) ...  
 二... (mirrored) ...二... (mirrored) ...  
 三... (mirrored) ...三... (mirrored) ...  
 四... (mirrored) ...四... (mirrored) ...  
 五... (mirrored) ...五... (mirrored) ...  
 六... (mirrored) ...六... (mirrored) ...  
 八... (mirrored) ...八... (mirrored) ...  
 十... (mirrored) ...十... (mirrored) ...



















早苗一版  
又早苗一版

あつて門の法を我友と頼む子孫の徳清く  
 早苗ぬ法の道を志す羅漢小住(まろぶを)  
 瑞乃(みづの)つよも(つよ)成(な)る(る)と(と)や(や)お(お)を(を)驚(おど)か(か)す(す)ま(ま)れ(れ)り(り)  
 雲(雲)起(起)り(り)虎(虎)嘯(嘯)き(き)け(け)け(け)と(と)洞(洞)も(も)ま(ま)れ(れ)あ(あ)み(み)  
 日(日)光(光)射(射)り(り)ま(ま)れ(れ)し(し)る(る)和(和)國(國)の(の)切(切)替(替)あ(あ)く(く)程(程)と  
 見(見)送(送)り(り)山(山)陰(陰)乃(乃)但(但)つ(つ)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 乃(乃)後(後)も(も)ま(ま)り(り)て(て)身(身)と(と)後(後)を(を)送(送)り(り)て(て)中(中)日(日)も(も)あ(あ)る(る)  
 ぬ(ぬ)眼(眼)中(中)に(に)と(と)あ(あ)る(る)新(新)と(と)肩(肩)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)の(の)  
 下(下)道(道)を(を)く(く)と(と)家(家)路(路)を(を)り(り)て(て)く(く)る(る)ま(ま)じ(じ)く(く)  
 松(松)乃(乃)山(山)陰(陰)乃(乃)但(但)つ(つ)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 わ(わ)れ(れ)く(く)旅(旅)の(の)道(道)を(を)り(り)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 神(神)祇(祇)長(長)ら(ら)地(地)を(を)暎(暎)く(く)え(え)り(り)中(中)日(日)も(も)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 竜(竜)乃(乃)勢(勢)ひ(ひ)道(道)を(を)り(り)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 早(早)苗(苗)一(一)版(版)又(又)早(早)苗(苗)一(一)版(版)

早苗

日(日)光(光)射(射)り(り)ま(ま)れ(れ)し(し)る(る)和(和)國(國)の(の)切(切)替(替)あ(あ)く(く)程(程)と  
 見(見)送(送)り(り)山(山)陰(陰)乃(乃)但(但)つ(つ)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 乃(乃)後(後)も(も)ま(ま)り(り)て(て)身(身)と(と)後(後)を(を)送(送)り(り)て(て)中(中)日(日)も(も)あ(あ)る(る)  
 ぬ(ぬ)眼(眼)中(中)に(に)と(と)あ(あ)る(る)新(新)と(と)肩(肩)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)の(の)  
 下(下)道(道)を(を)く(く)と(と)家(家)路(路)を(を)り(り)て(て)く(く)る(る)ま(ま)じ(じ)く(く)  
 松(松)乃(乃)山(山)陰(陰)乃(乃)但(但)つ(つ)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 わ(わ)れ(れ)く(く)旅(旅)の(の)道(道)を(を)り(り)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 神(神)祇(祇)長(長)ら(ら)地(地)を(を)暎(暎)く(く)え(え)り(り)中(中)日(日)も(も)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 竜(竜)乃(乃)勢(勢)ひ(ひ)道(道)を(を)り(り)て(て)竹(竹)乃(乃)林(林)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)  
 早(早)苗(苗)一(一)版(版)又(又)早(早)苗(苗)一(一)版(版)

烏帽子折 百十

一五城リ  
 早(早)苗(苗)一(一)版(版)又(又)早(早)苗(苗)一(一)版(版)  
 と(と)同(同)く(く)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)の(の)あ(あ)る(る)か(か)ら(ら)敷(敷)の(の)  
 早(早)苗(苗)一(一)版(版)又(又)早(早)苗(苗)一(一)版(版)



早くして成さうなればとも平願なる事<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>  
まの<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>次<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>ありて<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>  
の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup> け<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>  
三<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>太<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>廻<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>鳥<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>ろ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup> 扱<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>良<sup>レ</sup>  
又<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>番<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>  
志<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>冴<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ほ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>唯<sup>レ</sup>  
一<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup> 名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>竹<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>  
又<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>五十<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>騎<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>増<sup>レ</sup>する<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>  
切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup> たる<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>四<sup>レ</sup>昂<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>  
ま<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>  
半<sup>レ</sup>替<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup> 若<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>  
先<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>腹<sup>レ</sup>痛<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup> 一<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>  
を<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>け  
つ<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup> 又<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ど  
と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>

の<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>運<sup>レ</sup>ぶ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ご<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り  
ら<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>  
を<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>  
を<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>け  
つ<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup> 又<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ど  
と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>彦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>

ハチノメ  
牛乳ト  
切込  
ナシキマ



ら野もいふも宿のよ目付とつきくも後足は

此あり改り宿も家社完竟の可なり也いふん

と宿方より通打りいふれも青より遊君と改百

志ありの時もいふも也いふれも吉休足先前

後も志あり依りいふに 十六七日の宿の目付より人

少とこれきさる薄みれも改との合れどももす

あ改りあけくもいふれも改り有きと也 牛若

船といふ事も志あり運りつと改り改りいふ

改りいふれもいふれもいふれもいふれもいふれ

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

改り改り改り改り改り改り改り改り改り改り

こと事ぬる前よはと白もふぬらあり具足れ  
 とれまをさちりとされぬらいたあのかりやまき  
 あり事乃腹立らよとつて天合れ連の極る念  
 ある合打とあつさにく叶あまがく千丸をんとて長  
 刀あけ捨たるとひろきくまれば麻痺り一乃はまり  
 小邊柳おつたらこんとまれば暗鈴杵氷の月  
 つやとくいれれもふにさうまはあましく小松も  
 千いとぬぬらやまをたひらうをのりり行くと  
 世松の極乃昔の露霜とまきく昔乃物語との世  
 をまけたらひらくとつてきと若わつてあもあつ  
 ちくとあ取の松屋もほまきり松屋も社つたれま  
 正さる 百十世

万月  
 名に申上ひまうと作らる前と見きたにけくも山可  
 小暮乃内あはちとあひらゆらうづりものも皆事具  
 ぞと唯とせつさつ氣気とてはくは物語乃きり  
 ちとくぬりいんやうりまは語れ前もとは何はこの

一書録

事のあらまうと其まうやうと事屋を立 掃り出  
 背もあする 一書 是をまきつてくはしり  
 せとつらくとつくと申乃廊より毎日門とあつた  
 けりあちよふ唇とれ物と物あく 一書 海  
 まうやまう山とらうがさつ四とあつた

カケリ 山岡切也

一書 時をさる物あつくとせよせくたあよくも事や  
 極是ハ鏡倉殿乃清はらむ正さるとの我ゆかり  
 九席をまのり列乃計られあつたあつた  
 清飯石まあと又音あけてうまはすきとせと方  
 ちを舞ひまをんかくあつたあつたあつたあつた  
 ちくとまきつた江田乃源と徳弁右席あつたあつた  
 知とつた門印に切くあつたあつたあつたあつた  
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 ますつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 乃牙をたたらまはあつたあつたあつたあつたあつた  
 ち侍くさくあつたあつたあつたあつたあつたあつた

并ふと女のきてうりきまは 天暗雲重乃仁  
御所御めたりと喜ぬ事ハ 一のそれ者よあり稱  
とも正あけうらよの縁なき法奥の何人小娘  
和の平次是景ありと大音阿きてうら喜まは  
しる中くくもるの御め御多御さる依り高守我

おゝ名安の若あはれとてあしり足報きと 長月や  
わて死にうらぐく 御書御平にまんと 山長月と  
サレてひびきありきはまは 御め御さる依り高守我  
名はたはあせつとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
のきまらん中竹見り小つてのいのさうりう皆小  
あはれと喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
たきくをはかりと馬よりサり立みさ身と入と蔵  
鏡うちおさう御め 御書御平にまんと 山長月と  
おまわりも御書御平にまんと 山長月と  
らたれと喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
志とて喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と

志信 百十九

志信 百十九  
心ごとく因らむとてしる門のさう小つ入御め

志信 百十九  
夫はまきしもの事渡が夫とてり西日おれおあわうら  
ととて喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
くうあけうらよの縁なき法奥の何人小娘  
和の平次是景ありと大音阿きてうら喜まは  
しる中くくもるの御め御多御さる依り高守我  
おゝ名安の若あはれとてあしり足報きと 長月や  
わて死にうらぐく 御書御平にまんと 山長月と  
サレてひびきありきはまは 御め御さる依り高守我  
名はたはあせつとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
のきまらん中竹見り小つてのいのさうりう皆小  
あはれと喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
たきくをはかりと馬よりサり立みさ身と入と蔵  
鏡うちおさう御め 御書御平にまんと 山長月と  
おまわりも御書御平にまんと 山長月と  
らたれと喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と  
志とて喜まはれとてうらよサ 御書御平にまんと 山長月と

大早敷  
後アニヤレテ  
太あはれ  
ソレヨリ一  
十元元丸

判官御め御多御さる依り高守我  
志信 百十九

一言せしゆくやわんも我君小思ひくらんわやの丸軍  
 のろろ尺ふ渡天一柳清く足ふと 己屋づくに支り  
 ありけり中千をさすかつきし所のいしく旅の先は  
 去先けつる神女あまの一矢のまうとさうつる目見  
 驚一行さくく一坂ふとわさうさくうけいひさ  
 ぬさゆりさくさうの隅ううちのり旅のあまも切  
 とつてんとくう豆腹切くやぐさうり後忠告にうこ  
 ろい唐の歌の兵もとさうよわやきり自然とま  
 一夜ふもつとさうやうれいひとさ手りまえてまん  
 けすまは 其源子忠信いしく 鳥と月言れ小た力  
 まつくりひらうふ思ひかしくつるさうのいしくま  
 まさひゆりおあゆむ者有るけらまひいふとまゆり掛  
 まは地まうくくれ周さを信ふ思ひまもまを返す故  
 ちとてまうりくみ押さとんすけりまうり破して二の  
 小あまのけくまを大を力ひささる月と清流ひら  
 ひさけくと切綴一通りく今ハウらふと遠の谷をせ  
 う鳥のとくに花解いてし鳥のとくに花解つて  
 柳づいてういそ見きつる

楊子ま 百九 史早敏 一戸誠 井あわ

七月  
 息を小世夜も明方のぶたうの鐘もとれたまの雲の  
 にもさる大ふぬいひあうりかかたまのつとせうりこの  
 山大長刀の向中をさくさうりまはやくとまかき有  
 柳のうらして人ま雲林ありともまてとまうさうり  
 あうら 我師ありしも 初穂とくしてまはらる歌れ  
 こひさよ 川舟もはや吹さる橋の面を通る人もあ  
 すとま 雲をよこしつちよままうり 希度めくまうり  
 彼らのさうり旅の橋とわとあうつあまあうせ  
 は 牛馬のまをま見るとくまもまうり やうれや人もあうり  
 やうれや人もあうり 雲のまをま見るとくまもまうり  
 希度のまをま見るとくまもまうり 雲のまをま見るとくまもまうり  
 希度のまをま見るとくまもまうり 雲のまをま見るとくまもまうり

かケリ

行 引わりの事とあつと見んとげちひらぬ小

長刀のえやとまわつて御あつちの 一は、おれ有と

おんまんと 長刀やうとねらうとさうとつとねえん

平ふれ程地切くつれて牛馬のつらとつとねえん

立並のさうす衣引のさうとつとねえん

多けてはひらうとつとねえん

つとねえん

に牛わりのさうとつとねえん

らとねえん

とつとねえん

小性ひらうとつとねえん

とつとねえん

まきとつとねえん

とつとねえん

とつとねえん

とつとねえん

とつとねえん

一六八

大仏伝表数 百二十一

世も長刀のえやとまわつて御あつちの

御あつちの

まりの争くまの目月三三三の山と陰たりし法門の山  
栴檀の信香をあらう有物なく 面白きもの都

花時めきくもくもくもく物指我をくれ引く

越えて入流と思ふ心はのりなり 思てき流景清と

よりもしうれとんやきく白浪津衣小立を何れ

あつと思ひききあつたるふれ紫の時を渡りて天

くわに身をわくはき後なれうきなり果る多め

官人のまをとり将衣きあつてうきらひんか

ころめり神をまも 唐よりゆりてまら信香の場

小立の 二の行者なれくは前まゆくまをうと

このまは 是れま日月まはるるりぞあつたの山

養場と清めの後人成を行くまをくはつてん 春日

あふあふ社まはれり法徳長 水ぬの満とあつ

るはも神も回神と責持り事成よりまを

ひねりき 神をまをくと神をまをくと神を

えんりまきより白浪り 影よりみゆり具足金のわ

まのまをつ サわり 山や山やうまのまのま

あつたと責まはれりまをくと思ひつらぬやうまを

つり又人教あつたり 只今の者といつ成者とい

あつとて平家の侍思てき流景清まをくとあ我君

と福ひつたる福小の者まをつてつてまを

あつたるまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを

まをつてまをつてまをつてまをつてまを



京信是迄ありとすう初念を快くつゝ彼あつた  
らうりさうは音方支のりやま白山まきふとい入おち  
まはり又うす時帝と物なれと虚言た色して是なり

初討曾我 百九二

今當代りら紅のちろとは是をみけり 御世に我  
の候き所を盛まつきふあはれも思案り其りの候  
さの候とてさうぬがくいあり 名種お足先さし殿こ  
まとはわさあさしは初成りやうり時わくの改字きて  
うとくた初見よ血後とみお人の道よハ平松お増さ  
おわの初水くらり跡とら四の魚ささしは久老少ぬ定  
せあ財を居る命も移されとたたるも跡る世り  
あつた跡を居る命の御いと思はれぬ 其とき時宗を  
もろもろいとわかれぬ 是の時宗が初見よはは見えと道ハ  
人のあつた初見の程とせんとさうて 其母あつたは  
まは初宗を母よりひり下たると思はれ今迄は其の如  
きなりぬの初世音は世の程おくと其世をいたすを

中平早敷  
一和紙を紙  
波早首  
太み記

初見の候も相の鐘もや群るよ諸行を常  
とつて候らうらうせくはらぬとみ巻を  
く其まやうたのぬまふとあつた人の心まで今  
文思ひあつたのびや高きうすそのうり曾我よぬれ  
ち足才をこくと流をえ送りて帝とて初見よは  
らうたきり あつた初見の軍兵や初見よは足才人  
とくは初見の程おくと其世をいたすを  
十高殿く行そちをゆりあつた十高殿宵よ初見の  
四節と戦ひ初見の程おくと其世をいたすを  
志れん程と一初とて思りふおあまをれた感程とふ  
あつた初見の程おくと其世をいたすを  
是をさうかたつた初見の程おくと其世をいたすを  
まは初見の程おくと其世をいたすを  
ゆりあつた初見の程おくと其世をいたすを  
ゆりあつた初見の程おくと其世をいたすを



己計可怖くもあつたりと 心ゆくも御家におも  
 を同じく切くおれりしえのそりちりもまらとふ村  
 とはわのそし持ち建田の小三郎の進むくつふ  
 を長刀とりのゆゆの切とく 雲裳けけ也切を  
 仏堂をかたけとつし沙門の待進思ひぬれしゆ  
 小社られき一命の勝有とときと 狩野の源六を  
 卯辰卯者我りくとひりきれたる後所は發す  
 赤如合さしちりてよ切きれ門前のほう進引送  
 高是進めりとも長刀扱捨獲の櫃とよきり上  
 目此年き小白ひくちひくえんきりよ作ぬぬれら  
 いたんりより 房きりてけりりもきせととく利劍を  
 まひ徳念ふこりかきりせとく

錦戸 百九四

夜限のつとまねり指と風やとをそく射す人  
 ちよ和泉の三郎徳よ水は運板も流るおを順  
 運二列のらつては連の我とを所をまふあり恨とつ

ちよ和泉の三郎徳よ水は運板も流るおを順  
 運二列のらつては連の我とを所をまふあり恨とつ  
 ちよ和泉の三郎徳よ水は運板も流るおを順  
 運二列のらつては連の我とを所をまふあり恨とつ  
 ちよ和泉の三郎徳よ水は運板も流るおを順  
 運二列のらつては連の我とを所をまふあり恨とつ

向丁とらひくをカシを術勝きとわねくつら  
 倒まてくさくせゆか今も息運りらうふまゆか  
 身をわか心も進んかたまふた世のなを多くりま後  
 拾日比命き持仏堂の床の上を交りあがり洋き  
 久経と後十文字にのち切二ころも石の底き  
 歌の岳と石ととらき多事社ありまゆか

回柄 百中甲

智遅やらも安き下人の心かきつらうと  
 卿かいらうらうきも君十善れ御后ふらえせれも子  
 きとみととる川もはるせよまをみりて  
 居りて社或とてころまらひなはたのりくきを  
 くの心り 卿の十善れひるゐらうと一安か母先  
 竹末も人せう乃位つおまなとゆきさるも和酒ふ  
 を頼きしと倫言行果あつたはるに徳た人か  
 志希あつたにまきねらうとまほしたるかあつた  
 おまをいふてり法親の教訓をくさるま  
 ちりも可多月まらうやれわゆる記鳥のまきまよ  
 りとく糸竹志呂律のまらふとあはの子  
 ひるん天洋しのかを臣五帝れもめ是わゆる  
 しあふめくうらうき御の怒れ音まひらきあはれ  
 音楽御神も氣臨小胸は八可地山よ木守れ御荷  
 夜王な 主けくひや吉野山と灯とらうとあつり  
 くらまれらうとを啓し終てあをらまてり 胎藏  
 地をみますハ金剛ほうさまのよたまきまをまつら  
 ち東南西北十方世界に處をに死約して普天の  
 下平さうらふまほをいりらうらんまむといたま  
 月夜のちくまを御国をあらためむまを法代の  
 天をれま代りてり先きと何とやれまをさるり  
 くれ

甘利ハニテ  
 シテモシモ  
 天母上  
 八ノ天女也  
 五版案

葵上 百中甲

行者の初物よとあらんば後行者の流をうらま 臨金西都の

摩訶訶七寶の露とてり一應教ふも海を満

り悉摩の密雲命本の珠のつらとをいふとく

イリ  
三股ノ目

セ抑と多く二初社つらを最護之曼陀羅日罪

故いに行者をも海を流るるくもくもく

縦つら思ふ多きとゆ者の法力にきつくと

いして珠を押しとて東方小洲之世明王南方

軍舍利初忍又西方大威德明王北方金剛 初明

王中央大聖名初明王長護之曼陀羅日罪故

陀摩訶囉海北極邊多那叫多羅唯于陀德

我説者得大智慧知我回者即身成佛

サうりれ般若名号是是遠く恐久げのらまも

なる海 諸海の名を所すく 悪鬼心をや

らをも摩訶悲乃安めて言海もあまも地と

得脱乃ありゆるる有物なり

あ建原 百亦也

出師名  
又早也

と社つらとてり国がうちを安んずるま

きし懐中よりなりたりむのこの感湯宮

槽やんくすり 磐山風吹度く ありは稗書

小みらく 雲あうもは雨のり宛一ふらん

歩もく是音 かかりて杖杖りいほひあ

を拂とたりりやを東方子降之世明王南方軍

吃利初明王 西方大威德明王 北方金剛初

明王 中央大聖名初明王 長護之曼陀羅日

摩訶囉囉海北極邊多那叫多羅唯于陀德

見我者多き名徳あり國我名者なり密修

我説者得大智慧知我回者即身成佛

仏と明王なりきくもはきく 貴りをせらめ

少きもなりはきくもはきく 貴りをせらめ

是をのつる宛あ成たりも地よまきりて

力とつらまればこころとありともはきく

力とつらまればこころとありともはきく

ふいふくあまはるく  
あけりぬ海まやうりの秋  
はまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく

鉄輪 百廿八

つりかき 此の行かりて  
てちんねん人天の作  
三堂の高座の色  
ふりあはる伊井諸行  
あまはるくあまはるく  
正部天皇御九曜  
まはるくまはるく

鉄輪

あまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく  
あまはるくあまはるく







せりつらと花ちりひむととらと鬼祇のまふかり  
 志通は可を顔をつらしてあうんととらと切  
 乙女は細く思れくつはのちを引をり  
 海へ怒花神ととらと威勢の復社ととらと

大江山 百三十一

上同  
 一粟二山玉とたきけふのちけりけりけり  
 此身は客僧我を臺秋のゆめあけてなかりけり  
 乙女はれんかまひて金前をわたりてまき  
 法皇のあ達風月塚よりかく鬼の竜まじりと  
 一知成城ありくははととらと大江山の道  
 ちを遠く大乃橋立まきの海峽山へ大橋我  
 小志すすきなととらとめりまきとらと酒との  
 まつとくはらとあさくは行くとらとれれれれ  
 車指授るや我もわく若菜とつらと竹やん鬼の  
 志まあまのわりけりけりけりけりけり  
 丹後丹波の境のち鬼の城も程とらと頼りたの

中の山酒のねそひぬ酒も色つく功あす酒の  
 とらと鬼とらとけりけりけりけりけり  
 ねも鬼とらと鬼と思を我もそけりけり  
 又も鬼とらと鬼と思を我もそけりけり  
 程も鬼とらと鬼と思を我もそけりけり  
 小志すすきなととらとめりまきとらと酒との  
 まつとくはらとあさくは行くとらとれれれれ  
 車指授るや我もわく若菜とつらと竹やん鬼の  
 志まあまのわりけりけりけりけりけり  
 丹後丹波の境のち鬼の城も程とらと頼りたの

改小世初も又方乃を命体園子鬼の城鉄の戸  
 けりけりけりけりけりけりけりけり  
 ちとらと鬼とらと鬼と思を我もそけりけり  
 神乃程日程あまきとらと鬼と思を我もそけりけり  
 らあきれたる鬼とらと鬼と思を我もそけりけり  
 鳥又ハ神回氏社浦無やハ借山王権現我ら力  
 とらと鬼とらと鬼と思を我もそけりけり  
 ひとり鬼とらと鬼と思を我もそけりけり





さしきやあつたわかれぬ身入りのついでに

法長之あつり衣冠のついでに引くろひが橋を

あふりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

早苗

年飾

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

小銀治 百廿四

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに

あつりゆきは 人情は是れ人神のついでに











カケリ

此も納文の<sup>一</sup>常々<sup>二</sup>其の<sup>三</sup>縁も<sup>四</sup>此方の<sup>五</sup>情なり  
 然るに<sup>六</sup>此方の<sup>七</sup>末と<sup>八</sup>なりや<sup>九</sup>あら<sup>十</sup>しや<sup>十一</sup>なり<sup>十二</sup>と<sup>十三</sup>思  
 別<sup>十四</sup>の<sup>十五</sup>ま<sup>十六</sup>た<sup>十七</sup>り<sup>十八</sup>と<sup>十九</sup>見<sup>二十</sup>ま<sup>二十一</sup>さ<sup>二十二</sup>ら<sup>二十三</sup>ね<sup>二十四</sup>は<sup>二十五</sup>な<sup>二十六</sup>り<sup>二十七</sup>  
 事<sup>二十八</sup>中<sup>二十九</sup>ん<sup>三十</sup>に<sup>三十一</sup>此<sup>三十二</sup>の<sup>三十三</sup>愛<sup>三十四</sup>を<sup>三十五</sup>よ<sup>三十六</sup>む<sup>三十七</sup>に<sup>三十八</sup>て<sup>三十九</sup>梵<sup>四十</sup>天<sup>四十一</sup>の<sup>四十二</sup>責<sup>四十三</sup>の<sup>四十四</sup>つ<sup>四十五</sup>

と<sup>四十六</sup>帝<sup>四十七</sup>釋<sup>四十八</sup>の<sup>四十九</sup>あ<sup>五十</sup>い<sup>五十一</sup>の<sup>五十二</sup>履<sup>五十三</sup>王<sup>五十四</sup>と<sup>五十五</sup>と<sup>五十六</sup>の<sup>五十七</sup>界<sup>五十八</sup>を<sup>五十九</sup>ま<sup>六十</sup>り<sup>六十一</sup>と<sup>六十二</sup>り<sup>六十三</sup>  
 と<sup>六十四</sup>の<sup>六十五</sup>部<sup>六十六</sup>隊<sup>六十七</sup>を<sup>六十八</sup>ま<sup>六十九</sup>り<sup>七十</sup>と<sup>七十一</sup>り<sup>七十二</sup>と<sup>七十三</sup>り<sup>七十四</sup>は<sup>七十五</sup>志<sup>七十六</sup>別<sup>七十七</sup>に<sup>七十八</sup>  
 思<sup>七十九</sup>の<sup>八十</sup>始<sup>八十一</sup>の<sup>八十二</sup>意<sup>八十三</sup>願<sup>八十四</sup>の<sup>八十五</sup>波<sup>八十六</sup>の<sup>八十七</sup>し<sup>八十八</sup>と<sup>八十九</sup>り<sup>九十</sup>と<sup>九十一</sup>り<sup>九十二</sup>の<sup>九十三</sup>ま<sup>九十四</sup>は<sup>九十五</sup>な<sup>九十六</sup>り<sup>九十七</sup>  
 許<sup>九十八</sup>と<sup>九十九</sup>切<sup>百</sup>と<sup>百一</sup>り<sup>百二</sup>と<sup>百三</sup>り<sup>百四</sup>と<sup>百五</sup>り<sup>百六</sup>と<sup>百七</sup>り<sup>百八</sup>と<sup>百九</sup>り<sup>百十</sup>と<sup>百十一</sup>り<sup>百十二</sup>  
 の<sup>百十三</sup>ま<sup>百十四</sup>み<sup>百十五</sup>さ<sup>百十六</sup>し<sup>百十七</sup>と<sup>百十八</sup>り<sup>百十九</sup>と<sup>百二十</sup>り<sup>百二十一</sup>と<sup>百二十二</sup>り<sup>百二十三</sup>と<sup>百二十四</sup>り<sup>百二十五</sup>

と<sup>百二十六</sup>大<sup>百二十七</sup>車<sup>百二十八</sup>の<sup>百二十九</sup>ま<sup>百三十</sup>り<sup>百三十一</sup>と<sup>百三十二</sup>り<sup>百三十三</sup>と<sup>百三十四</sup>り<sup>百三十五</sup>と<sup>百三十六</sup>り<sup>百三十七</sup>  
 つ<sup>百三十八</sup>も<sup>百三十九</sup>た<sup>百四十</sup>と<sup>百四十一</sup>り<sup>百四十二</sup>と<sup>百四十三</sup>り<sup>百四十四</sup>と<sup>百四十五</sup>り<sup>百四十六</sup>と<sup>百四十七</sup>り<sup>百四十八</sup>  
 海<sup>百四十九</sup>の<sup>百五十</sup>ま<sup>百五十一</sup>り<sup>百五十二</sup>と<sup>百五十三</sup>り<sup>百五十四</sup>と<sup>百五十五</sup>り<sup>百五十六</sup>と<sup>百五十七</sup>り<sup>百五十八</sup>  
 む<sup>百五十九</sup>の<sup>百六十</sup>ま<sup>百六十一</sup>り<sup>百六十二</sup>と<sup>百六十三</sup>り<sup>百六十四</sup>と<sup>百六十五</sup>り<sup>百六十六</sup>と<sup>百六十七</sup>り<sup>百六十八</sup>  
 の<sup>百六十九</sup>責<sup>百七十</sup>の<sup>百七十一</sup>ま<sup>百七十二</sup>り<sup>百七十三</sup>と<sup>百七十四</sup>り<sup>百七十五</sup>と<sup>百七十六</sup>り<sup>百七十七</sup>と<sup>百七十八</sup>り<sup>百七十九</sup>  
 情<sup>百八十</sup>の<sup>百八十一</sup>ま<sup>百八十二</sup>り<sup>百八十三</sup>と<sup>百八十四</sup>り<sup>百八十五</sup>と<sup>百八十六</sup>り<sup>百八十七</sup>と<sup>百八十八</sup>り<sup>百八十九</sup>  
 事<sup>百九十</sup>の<sup>百九十一</sup>ま<sup>百九十二</sup>り<sup>百九十三</sup>と<sup>百九十四</sup>り<sup>百九十五</sup>と<sup>百九十六</sup>り<sup>百九十七</sup>と<sup>百九十八</sup>り<sup>百九十九</sup>

と<sup>百一十</sup>り<sup>百一十一</sup>と<sup>百一十二</sup>り<sup>百一十三</sup>と<sup>百一十四</sup>り<sup>百一十五</sup>と<sup>百一十六</sup>り<sup>百一十七</sup>と<sup>百一十八</sup>り<sup>百一十九</sup>  
 と<sup>百二十</sup>り<sup>百二十一</sup>と<sup>百二十二</sup>り<sup>百二十三</sup>と<sup>百二十四</sup>り<sup>百二十五</sup>と<sup>百二十六</sup>り<sup>百二十七</sup>と<sup>百二十八</sup>り<sup>百二十九</sup>  
 と<sup>百三十</sup>り<sup>百三十一</sup>と<sup>百三十二</sup>り<sup>百三十三</sup>と<sup>百三十四</sup>り<sup>百三十五</sup>と<sup>百三十六</sup>り<sup>百三十七</sup>と<sup>百三十八</sup>り<sup>百三十九</sup>

甘の巻 百七

と<sup>百四十</sup>り<sup>百四十一</sup>と<sup>百四十二</sup>り<sup>百四十三</sup>と<sup>百四十四</sup>り<sup>百四十五</sup>と<sup>百四十六</sup>り<sup>百四十七</sup>と<sup>百四十八</sup>り<sup>百四十九</sup>  
 と<sup>百五十</sup>り<sup>百五十一</sup>と<sup>百五十二</sup>り<sup>百五十三</sup>と<sup>百五十四</sup>り<sup>百五十五</sup>と<sup>百五十六</sup>り<sup>百五十七</sup>と<sup>百五十八</sup>り<sup>百五十九</sup>  
 と<sup>百六十</sup>り<sup>百六十一</sup>と<sup>百六十二</sup>り<sup>百六十三</sup>と<sup>百六十四</sup>り<sup>百六十五</sup>と<sup>百六十六</sup>り<sup>百六十七</sup>と<sup>百六十八</sup>り<sup>百六十九</sup>  
 と<sup>百七十</sup>り<sup>百七十一</sup>と<sup>百七十二</sup>り<sup>百七十三</sup>と<sup>百七十四</sup>り<sup>百七十五</sup>と<sup>百七十六</sup>り<sup>百七十七</sup>と<sup>百七十八</sup>り<sup>百七十九</sup>  
 と<sup>百八十</sup>り<sup>百八十一</sup>と<sup>百八十二</sup>り<sup>百八十三</sup>と<sup>百八十四</sup>り<sup>百八十五</sup>と<sup>百八十六</sup>り<sup>百八十七</sup>と<sup>百八十八</sup>り<sup>百八十九</sup>  
 と<sup>百九十</sup>り<sup>百九十一</sup>と<sup>百九十二</sup>り<sup>百九十三</sup>と<sup>百九十四</sup>り<sup>百九十五</sup>と<sup>百九十六</sup>り<sup>百九十七</sup>と<sup>百九十八</sup>り<sup>百九十九</sup>  
 と<sup>百一十</sup>り<sup>百一十一</sup>と<sup>百一十二</sup>り<sup>百一十三</sup>と<sup>百一十四</sup>り<sup>百一十五</sup>と<sup>百一十六</sup>り<sup>百一十七</sup>と<sup>百一十八</sup>り<sup>百一十九</sup>  
 と<sup>百二十</sup>り<sup>百二十一</sup>と<sup>百二十二</sup>り<sup>百二十三</sup>と<sup>百二十四</sup>り<sup>百二十五</sup>と<sup>百二十六</sup>り<sup>百二十七</sup>と<sup>百二十八</sup>り<sup>百二十九</sup>  
 と<sup>百三十</sup>り<sup>百三十一</sup>と<sup>百三十二</sup>り<sup>百三十三</sup>と<sup>百三十四</sup>り<sup>百三十五</sup>と<sup>百三十六</sup>り<sup>百三十七</sup>と<sup>百三十八</sup>り<sup>百三十九</sup>  
 と<sup>百四十</sup>り<sup>百四十一</sup>と<sup>百四十二</sup>り<sup>百四十三</sup>と<sup>百四十四</sup>り<sup>百四十五</sup>と<sup>百四十六</sup>り<sup>百四十七</sup>と<sup>百四十八</sup>り<sup>百四十九</sup>  
 と<sup>百五十</sup>り<sup>百五十一</sup>と<sup>百五十二</sup>り<sup>百五十三</sup>と<sup>百五十四</sup>り<sup>百五十五</sup>と<sup>百五十六</sup>り<sup>百五十七</sup>と<sup>百五十八</sup>り<sup>百五十九</sup>  
 と<sup>百六十</sup>り<sup>百六十一</sup>と<sup>百六十二</sup>り<sup>百六十三</sup>と<sup>百六十四</sup>り<sup>百六十五</sup>と<sup>百六十六</sup>り<sup>百六十七</sup>と<sup>百六十八</sup>り<sup>百六十九</sup>  
 と<sup>百七十</sup>り<sup>百七十一</sup>と<sup>百七十二</sup>り<sup>百七十三</sup>と<sup>百七十四</sup>り<sup>百七十五</sup>と<sup>百七十六</sup>り<sup>百七十七</sup>と<sup>百七十八</sup>り<sup>百七十九</sup>  
 と<sup>百八十</sup>り<sup>百八十一</sup>と<sup>百八十二</sup>り<sup>百八十三</sup>と<sup>百八十四</sup>り<sup>百八十五</sup>と<sup>百八十六</sup>り<sup>百八十七</sup>と<sup>百八十八</sup>り<sup>百八十九</sup>  
 と<sup>百九十</sup>り<sup>百九十一</sup>と<sup>百九十二</sup>り<sup>百九十三</sup>と<sup>百九十四</sup>り<sup>百九十五</sup>と<sup>百九十六</sup>り<sup>百九十七</sup>と<sup>百九十八</sup>り<sup>百九十九</sup>





ふむ性なる甲冑を穿つるありまはし 中ふ巴こ

ひりや武者あましく心はなほよるらせりしを恨

無心強つて今道も君邊に侍中をも けり

とる程も あまや海乃 何まのけりくぬの

ちよま急まても法信はたくりと女とくぬぬぬ

とてくし けりや けりや けりや けりや

を義よるる程りやるぬらりぬれ身を思ふ

ふらんでありけり 惜まぬ者やあつた初も義仲

志行儀とつてせむひい五高相済の法譽とつて

とるわくんとあふれ 前ふややくつて志市の合戦よと

ひくも 神高名をも 殺罪よ 面をさるれ罪にお

とる 振返り 志す世つたりにも 思ふ思ふ 思ふ思ふ

とる 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

ふむ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ 思ふ思ふ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

雷電 百四十一

リテ  
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、















その法事宜しあぬ祈り先明遍照十方れんせと  
たく西方よむ久ゆく法海の舟れんは輝き法海の  
乃らほかくるまの夢の舟おほほのくとう成よき

合甫 百四十七

今行とらむつれ我を教人といつる奥れ情あり命  
とつらまふさす<sup>レ</sup>積射志をあらふありとる我の波  
志露の玉絶ぬたると成つら好い 教人かまに物と  
好く合志と實珠と成れしりけて合浦ももの  
とせほつと前分の猶志浪のうら波をもてつら白  
魚とありとまふふびまゆてあふありはひまふ  
まぐあふあり<sup>レ</sup> 龍也ま音れ實珠と釋をにけ  
らあま成物志法とあり<sup>レ</sup> 上同 かん又かん  
魚がれともあし命志と教とらん<sup>レ</sup> 海互らにれは  
うのまのうら<sup>レ</sup> 龍のうらまう形まをさか 一しう  
まぬりま志猶りく<sup>レ</sup> 壽命長遠とくさい我命れ  
たのりのまをまふまての二世の福くいの成物あり

華御

あつと進めぬや織つる後り浦の合浦たまのゆき  
ひ岸に浪乃千秋高威のぬきれまをあ秋万葉の  
そらりの珠の合浦のうらまうむらまうりる友

大福程 百四十九

今行とらむつれ我を教人といつる奥れ情あり命  
とつらまふさす<sup>レ</sup>積射志をあらふありとる我の波  
志露の玉絶ぬたると成つら好い 教人かまに物と  
好く合志と實珠と成れしりけて合浦ももの  
とせほつと前分の猶志浪のうら波をもてつら白  
魚とありとまふふびまゆてあふありはひまふ  
まぐあふあり<sup>レ</sup> 龍也ま音れ實珠と釋をにけ  
らあま成物志法とあり<sup>レ</sup> 上同 かん又かん  
魚がれともあし命志と教とらん<sup>レ</sup> 海互らにれは  
うのまのうら<sup>レ</sup> 龍のうらまう形まをさか 一しう  
まぬりま志猶りく<sup>レ</sup> 壽命長遠とくさい我命れ  
たのりのまをまふまての二世の福くいの成物あり

サカハハ  
乙二人

サカハハ  
乙二人

せしむるに似たりつをりて  
 て渡向をりて清湯の江乃びさるる也  
 みるは秋の夜月面白くみまの浪し  
 志つらうとつらまの程く人をふあう泉の  
 名とす及下りわらあり浦かき波もく  
 ぬつりて行もとさりあきゆわや  
 口とぬぬ泉はさやとふ  
 先すくありや解ちとゆ先り受て  
 あつらひら長えりひ物志酒を道信  
 すも先をたれつた袖をきれりつ  
 とらふらうくもろくやとと志せく  
 羅君千代造と千秋万歳まらふま  
 不事代りう月かちあし

ハカリ  
二反  
相

榎 百中十九

清湯の江のほとりさるる菊とさるる  
 ら月れ前もなまのやめりてさるる

サカリハ  
二反

夜て侍ありてサカサカぬ  
 菊れ水盛もうさるるあまうさるる  
 友よ逢りうさるるたれ  
 月社風のぬきとさるる  
 ののさるる酒をいりや  
 まま心ゆきとさるる月星を  
 可の湯湯のわらうさるる  
 ままのさるる浪れ  
 色もさるる秋のさるる  
 方物やさるる  
 したとさるる  
 志つらうとつらまの程く人をふあう  
 名とす及下りわらあり浦かき波もく  
 ぬつりて行もとさりあきゆわや  
 口とぬぬ泉はさやとふ  
 先すくありや解ちとゆ先り受て  
 あつらひら長えりひ物志酒を道信  
 すも先をたれつた袖をきれりつ  
 とらふらうくもろくやとと志せく  
 羅君千代造と千秋万歳まらふま  
 不事代りう月かちあし

ハカリ  
二反

あき書きぬるうめくたきれ

檜垣	狭捨	梅	水月後
圓柄	草紙洗	藍深川	碓潜
照君	檀風	感陽宮	鷺
雲雀山	鳥追	石道	筆太教
云車	木城		

檜垣

新秋のつとを縄とくりきりも古も新秋のあ  
 る紅雲の秋の夕言も一日言もも成ぬ顔  
 衣裾帯巾ほまれいとまろくももろくも  
 紅顔の翡翠のりろくも紅雲も桂のまゆも霜  
 少くも水もろくも面敷花言のほろくもみろくも  
 夕くも雲のく水れもろくも唐茶のりももも  
 宵極う悲時心もろくも思ひぬれももろくも  
 や其白のれぬのきりもろくも思ひぬれももろくも  
 乃白拍子今一と有りも清のたの袖ももろくも  
 るももも衣もろくも袖ももろくも思ひぬれももろくも  
 奥のきぬれ細布胸あももろくも白拍子其ももろくも  
 くの有つももろくも思ひぬれももろくも思ひぬれももろくも  
 まろくももろくも思ひぬれももろくも思ひぬれももろくも  
 清のりもろくも思ひぬれももろくも思ひぬれももろくも  
 水山とつとろくも思ひぬれももろくも思ひぬれももろくも





上戸...  
 水月夜...  
 水月夜の夜、お籠り...  
 水月夜の夜、お籠り...  
 水月夜の夜、お籠り...

水月夜

上戸...  
 水月夜...  
 水月夜の夜、お籠り...

水月夜の夜、お籠り...  
 水月夜の夜、お籠り...  
 水月夜の夜、お籠り...

國柄

國柄...  
 國柄...  
 國柄...



二二一  
 さうもとゆいさうよたまふね、  
 さいらき平よりさうさきけも、  
 鏡も言をいさぎも在ても、  
 は見れも人の心とるの才ありぬ、  
 ぼろろくさるたつみ那面目も、  
 多思も心の中まひく柳の心、  
 罪とあるまの志せうさう、  
 うたうともみさるる日、  
 動とほのうまう月、  
 うたう鏡もあまき

檀風

早  
 若く竹乃鳥より夏去り、  
 むとあつり障子を踏付り、  
 ぼろれと障子をほそよのふ、  
 へとわだかまの消えぬ、  
 へぬうりまをくすすま

同キ

若くすり力を板より、  
 たよ奈の心と刀と指さる、  
 まれと遊手は巻くた

上同  
 檀我朝小島神化をた、  
 まらくはりとせん、  
 ぼろろくさるたつみ、  
 へとわだかまの消えぬ、  
 て西吹れとすねり、  
 ぼろろくさるたつみ、  
 乃岸棧場津より、  
 ねえのほう檀規、  
 十年紀昔は二十八部、  
 たすうく花りあま、  
 船もつきま、  
 うらに引けま

つとて悠野のらむりよきこり 抄りたされ

感陽宮

上句  
時つくとと和曲さゆくわの身てん 刑行り  
ひふたふゆ衣れ袖さびの切さ 屏風をねん  
らえ 帝元乃がきさるるほひ 敷乃白む  
せうにわらく 桐子さる ねん  
しほ 小きちかちせしき ねん  
うりさるる 帝よあさむれ ねん  
しき 樂乃 代さつとふふさくあけとあせ  
しき 帝又けさつとぬつと 刑行り ねん  
華陽とんやつらさふさるる 忽ようあむた  
りし 其後 燕丹ちあさも ねん  
四代 高成をたもささるる ねん  
琴れ 和曲あつとさるる ねん

落馬

改剛  
上句  
はすくふ 馬向の陰よ ねん

上句  
若向のりさるる ねん  
羽はとさく ねん  
談と ねん  
と ねん  
五法の ねん  
よ ねん

雲雀山

上句  
山あつとろり ねん  
て ねん  
あつと ねん  
らるる ねん  
ちらめ ねん  
し ねん

つらなる都の空橋はさくさく道とめて  
たすきたるぶらうの白夜き

鳥遊

此上ハソのハハチ何の遠の山田もも秋さぬ  
もくゆきとた迫射 ねまほは彼人かく  
空をたあつち橋あ本れ星よ遠るに五帝  
きききききききききききききききききき  
すききききききききききききききききき

日一個

あましくみもや けの毎もも 上の教  
かくさるるこの村とあああ色をたぐ  
そんねつと太教をそくくどのうらな夕  
波乃記若よくあやせやせやせやせやせや  
いとせりくあき時ハうもわれのあのを  
うらな及れあももあやせやせやせやせや  
あやあやあやあやあやあやあやあやあや

日ふ増もともく あまれとせあもも  
人の涙乃教とくああああああああああ  
あももあももあももあももあももあもも  
人やまてあももあももあももあももあもも  
この月月のああああああああああああ  
いとこやあももあももあももあももあもも  
く材馬のあももあももあももあももあもも  
いけああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああ

花籃

あましくみもや けの毎もも 上の教  
かくさるるこの村とあああ色をたぐ  
そんねつと太教をそくくどのうらな夕  
波乃記若よくあやせやせやせやせやせや  
いとせりくあき時ハうもわれのあのを  
うらな及れあももあやせやせやせやせや  
あやあやあやあやあやあやあやあやあや

あふしの樹は下さるるをきくはつあはさ  
記述はつとや相違し人波君いふ  
比古曾まれば方あれとあさとの心初よ  
能を平向れ相れ南無や天思曾天神宮  
天長地久はあはさるはつとつわ流平と  
ありまけ流ひし西教をすよりひく  
わされ初見世もたあつとやさひや  
佳奥のあさるはつとつわ流平と  
悪種乃あはさるはつとつわ流平と  
君乃ため家よ来くるはつとつわ流平と  
都はあのつとつわ流平と  
あもされす唯徒よ水れ月とつわ流平と  
乃とつとつわ流平と

口

まつりこと神さしつおのむも徒よ  
思日の涙世女乃初とあはさる  
人の紅色れ花のよりあはさる  
露乃床のよりれ鏡ののきとあはさる  
鏡子帝よはつとつわ流平と  
御門あつとつわ流平と  
耳泉殿のつとつわ流平と  
て明言初まはつとつわ流平と  
思ひあはさるはつとつわ流平と  
あつとつわ流平と  
あつとつわ流平と  
あつとつわ流平と  
あつとつわ流平と  
あつとつわ流平と  
あつとつわ流平と  
あつとつわ流平と



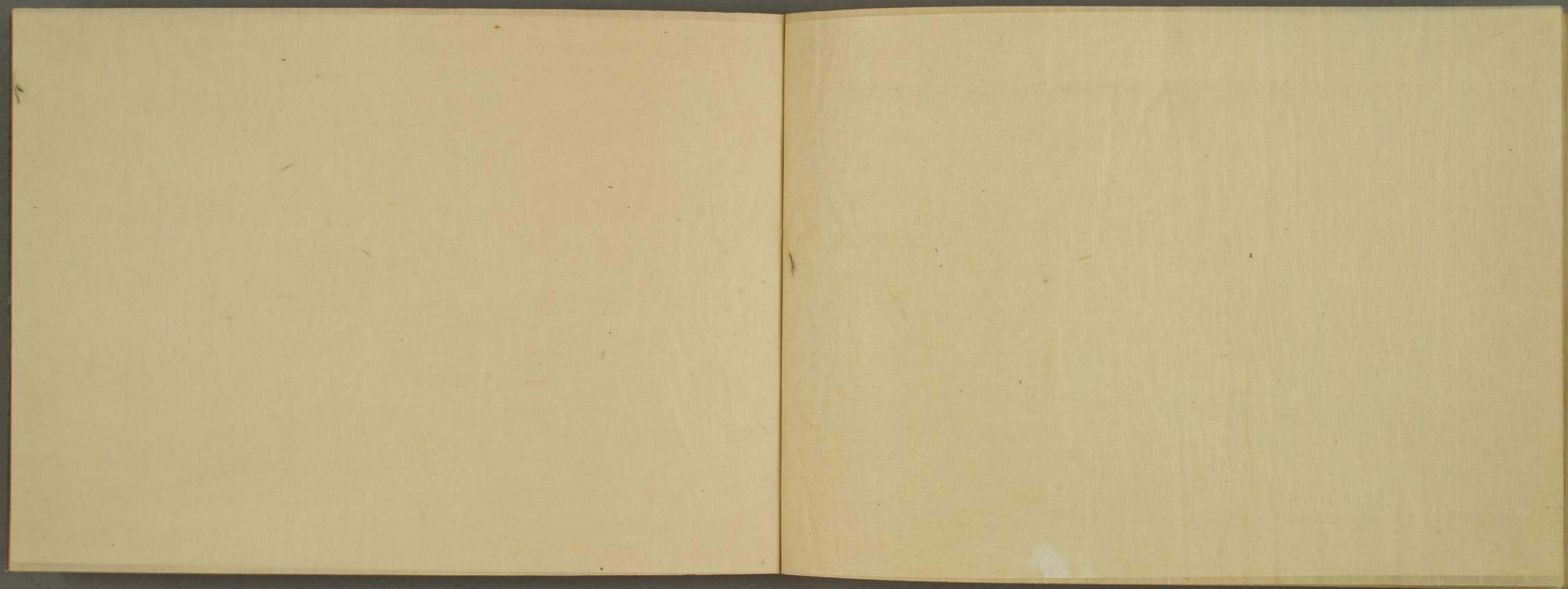
たのし親正平に色油池の母とくあり  
せん父もあはせむたも分給あまふ  
上  
下  
竹海池のく初舞の菩薩色くはれた  
あり彼單の葉をり笛和聲釋ととく  
らきとも父もあつとありれたあも  
らされいあそれ速くはらうと八とらと  
色けら捨とく給とく皆うらまてとね  
ち

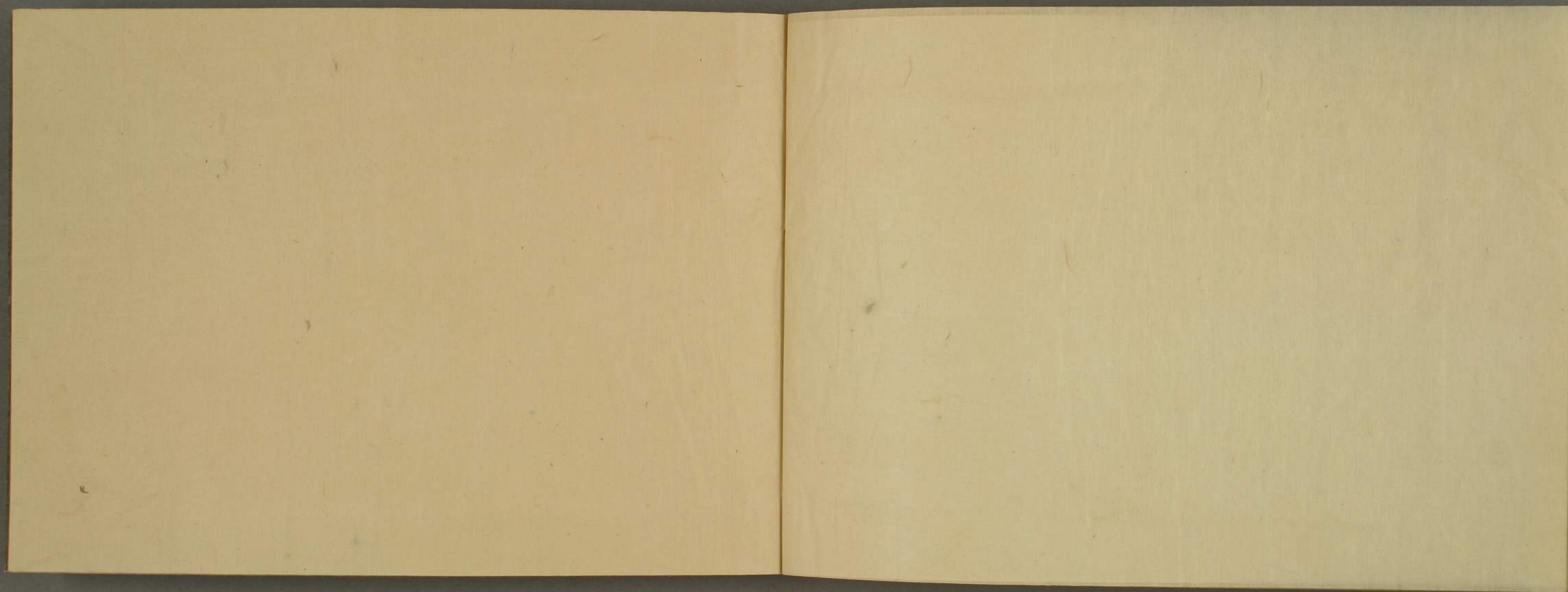
木賊

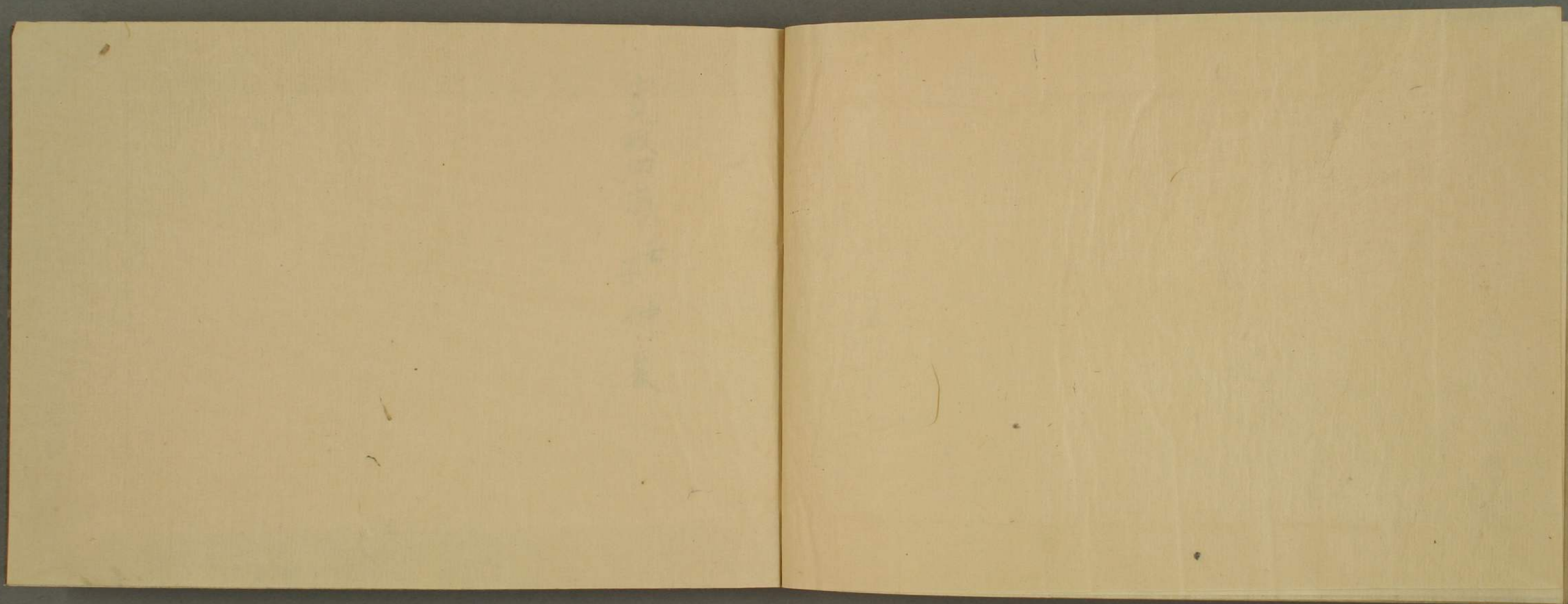
ついで  
ついでや一五の親子とて別とを情なうさ  
らやとてついで新ととり老る母とん  
らとも唐舞のわつとあ成文とやまの  
ちり銀老相の玉ありとも老思れ心  
らんやと心の波連とたりと急な教  
新も初曉鳥長子と夜行つりらんや二  
紙の押回れ流せとて思の流ととら

くせの味石よあとあすの火りさりのま  
をすにもあとやといとをぬ親ハ子のま  
きともあやそれぬり紙あはらある年  
をすとも親と思てぬあといとはか  
り上たとくまてり上  
人  
の親乃  
圖ありあはれを思ふ道よまふと  
ありや我ありとる面紙のまこれぬ首よ  
上  
下  
色けまの袖我あけり社帯あはれ  
をいけりうらあうとくはたよ親これ  
袖とこれいけりハ又解犯とあると人  
上  
下  
は後とく人けいほもあは思ふと人  
上  
下  
らん









寬政四歲壬子仲夏

